学 位 論 文

# 青年期の自己愛的脆弱性と発達早期要因の検討

## ── 心理社会的課題，愛着スタイル，自己対象体験との関連──

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻

神谷　真由美

# 目　次

第 1 章　本研究の背景と目的 …… 1
第 1 節　青年期の自己愛に関する研究の動向 …… 1
1.　青年期の自己愛の高まり
2.　自己愛研究のはじまり
3.　自己愛傾向の 2 類型に関する研究の動向
4.　自己愛的脆弱性に関する研究の動向
第 2 節　Kohut の自己の発達に関する研究の動向 …… 11
1.　Kohut による自己の発達論
2.　自己愛傾向と他の発達理論との関連に関する研究の動向
3.　自己愛傾向と自己対象体験の関連に関する研究の動向
第 3 節　本研究の目的 …… 24

第 2 章　自己愛的脆弱性による青年の類型化 (研究 1) …… 26
1.　目的
2.　方法
3.　結果
4.　考察

第 3 章　自己愛的脆弱性と心理社会的課題および愛着スタイルとの関連 (研究 2) …… 32
第 1 節　自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連 (研究 2-1) …… 32
1.　目的
2.　方法
3.　結果
4.　考察

第 2 節　自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連 (研究 2-2) …… 38
1.　目的
2.　方法
3.　結果
4.　考察

第 4 章　自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連 (研究 3) …… 50
第 1 節　自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連
(研究 3-1) …… 50
1.　目的
2.　方法
3.　結果
4.　考察
第 2 節　自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連
(研究 3-2) …… 56
1.　目的
2.　方法
3.　結果と考察
第 3 節　自己愛的脆弱性と自己対象体験の無意識的側面との関連
(研究 3-3) …… 74
1.　目的
2.　方法
3.　結果
4.　考察

第 5 章　総合考察 …… 82
第 1 節　本研究の成果 …… 82
第 2 節　本研究の限界と今後の課題 …… 85

引用文献

# 第 1 章　本研究の背景と目的

## 第 1 節　青年期の自己愛に関する研究の動向

### 1. 青年期の自己愛の高まり

青年期は，最も自己愛 (ナルシシズム; narcissism) が高まる時期と言われている (小塩, 2004)。Blos (1962 野沢訳 1971, 1967) は，青年期を「第二の分離―個体化過程 (the second separation-individuation process)」と捉えた。そして，両親からの精神的離脱と個の自立が発達の課題となり，両親からの心的エネルギーの撤去が自己の過大評価や自己中心性などの自己愛的な性質をもたらすと指摘した。つまり，両親からの精神的離脱のプロセスにある青年期は自我が弱体化して脆弱となり，その防衛として自己愛が高まることが示唆されている (原田, 2012)。小此木 (1981, 1999) によると，このような自己愛の高まりは，前期・中期青年期では自己の過大評価,傲慢な態度や権威への反抗といった形をとるが，やがて自分を超えた理想像への同一化，自我理想，アイデンティティといった開かれ，社会化された自己愛へと発展する。以上から，青年期特有の自己愛の高まりは，青年の自立や発達の促進に重要な役割を持つ。しかし，一方では自己愛の高まりから，周囲の反応に敏感で傷つきやすく，様々な症状や不適応を引き起こす青年もいる。

### 2. 自己愛研究のはじまり

自己愛とは，心理臨床大事典によると「自分自身を愛の対象とする心の状態 (中村, 2004)」とされている。そもそも自己愛という言葉の起源は，ギリシャ神話のナルキッソス (Narsisse) 神話に由来する。以下に，その内容を示す。

美しい青年ナルキッソスは，多くの人から求愛されたが，それらを残

酷にはねつけていた。傷ついたニンフの 1 人が「彼が深く愛しているものを，決して手に入れることができないようにさせてほしい」と祈り，その祈りは復讐の女神に聞き入れられた。ある日，狩りに出かけたナルキッソスは，泉に映った自分自身の姿に恋をし，寝食も忘れて，泉のほとりをさまよった。決して手の届かぬことに絶望した彼は，思い悩み，水の中に落ちて死んでしまった。彼が落ちたところに白い花が咲いており，その花にナルキッソス，すなわち水仙という名がつけられた (Bulfinch, 1855 野上訳 1978; 山室, 1962) 。

Ellis (1898) は，このナルキッソスの神話を引用し，自己の身体を性の対象とする自体愛の状態を,「ナルキッソス様の～」と表現した。その後 Näcke (1899) は，性的錯綜の状態を表す語としてナルシシズムという語を提起した (上地, 2004; 川崎, 2011)。

自己愛が精神分析学的な概念として広く用いられるようになったのは, Freud (1914 懸田他訳 1969) により,「ナルシシズム入門」が出版されて以降と言われる (川崎, 2011; Ronningstam, 2005)。Freud (1914 懸田他訳 1969) は，自己愛を一次的自己愛と二次的自己愛に区別した。乳児は，自己と外界の対象の区別ができておらず，リビドーは自我のみに向けられている。これを一次的自己愛の状態という。やがて，外界の対象が認識されるにつれてリビドーは対象に向けられるようになり，対象愛の段階が到来する。しかし，対象愛の段階に達した後でも，不安や葛藤が原因でリビドーが対象から撤収され，再び自我のみに向けられることがあり, これを二次的自己愛の状態とした。Freud (1914 懸田他訳 1969) は，自我に向けられる自我リビドーと対象に向けられる対象リビドーの総和は一定であるとし，自己愛と対象愛は対立するものであり，自己愛を克服することにより対象愛が可能になると考えた。

## 3. 自己愛傾向の 2 類型に関する研究の動向

Freud (1914 懸田他訳 1969) が自己愛の概念を提唱して以降，精神分析学における自己愛の概念は多くの研究者により拡張・再解釈されている。加えて，自己愛という用語は精神分析にとどまらず，一般心理学の実証研究にも用いられるようになっている。それに伴い，自己愛は，一般的な心理的機能を表す用語としても，特定のパーソナリティやその障害を表す用語としても使用されるようになり，定義・理論ともに多義的な状態となっている (川崎, 2011)。

### (1) 自己愛傾向の 2 類型とは

精神分析において，自己愛概念の大きな支流となっているのは，Kernberg (1975, 1982, 1998 佐野監訳 2003) と Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) の理論である (川崎，2011)。Kernberg (1975, 1982, 1998 佐野監訳 2003) は，自己愛性パーソナリティ障害をもつ人の性格特徴は，病的誇大自己を反映したものとした。病的誇大自己とは，現実の自己表象と理想的な自己表象，理想的な対象表象を包摂している自己構造である。現実における自己のイメージと，幼く幻想的・理想的で万能な自己イメージ，非現実的に受容的で愛情豊かな親のイメージとが区別されず一体となった，現実と理想の境界，自己と他者の境界があいまいな病的な自己構造を意味する (川崎, 2011)。

一方で，Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) は, 病理的な自己愛と健康な自己愛を連続的なものと考え，自己愛は，重要な他者との特別な性質の関係を通して成熟するとした。そのため，自己愛性パーソナリティ障害をもつ人は，自己愛の発達が停滞した状態として理解される。

両者の違いは，臨床技術の違い (Akhtar & Thomson, 1982) や，研究対象の違い (Gabbard, 1994 舘監訳 1997) から生じている可能性が指摘されている (小塩, 2004)。Kernberg が比較的重篤な入院患者に基づいて理論構築を行っているのに対し，Kohut は精神分析を行うことが可能な，比較的パーソナリティ水準が高い外来患者に基づいて理論構築を行っている (Gabbard, 1994 舘監訳 1997)。また，この 2 種類の自己愛については複数の研究者が指摘しているが，最も有名なものに Gabbard (1994 舘監訳 1997) の見解があげられる。Gabbard は自己愛性パーソナリティ障害を，対人的関わりにおける典型的なスタイルに基づいて 2 つの異なるタイプを両極とする連続体であると指摘した (Table 1)。このうち，「周囲を気にかけない自己愛的な人」は，Kernberg (1975, 1982, 1998 佐野監訳 2003) のいう自己愛性パーソナリティ障害，「周囲を気にかける自己愛的な人」は，Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) のいう自己愛性パーソナリティ障害である。

Table 1
自己愛性パーソナリティ障害の 2 つのタイプ
(Gabbard, 1994 舘監訳 1997, p. 89, 表 16-2)

| 周囲を気にかけない自己愛的な人 | 周囲を気にかける自己愛的な人 |
|---|---|
| 1. 他の人びとの反応に気づくことがない。 | 1. 他の人びとの反応に過敏である。 |
| 2. 傲慢で攻撃的である。 | 2. 抑制的で，内気で，あるいは自己消去的でさえある。 |
| 3. 自己に夢中である。 | 3. 自己よりも，他の人びとに注意を向ける。 |
| 4. 注目の中心にいる必要がある。 | 4. 注目の的になることを避ける。 |
| 5.「送信者であるが，受信者ではない」。 | 5. 侮辱や批判の証拠が無いかどうか，注意深く，他の人びとに耳を傾ける。 |
| 6. 明らかに，他の人びとによって傷つけられたと感じることに鈍感である。 | 6. 容易に傷つけられたという感情をもつ。羞恥や屈辱を感じやすい。 |

2 つの異なるタイプの自己愛性パーソナリティ障害が議論されるなか，

アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association) による診断・統計マニュアル DSM-Ⅲでは，Kernberg (1975, 1982, 1998 佐野監訳 2003) のいう自己愛性パーソナリティ障害のタイプが診断基準として集約された (川崎, 2011)。DSM-Ⅳ-TR (American Psychiatric Association, 2000 高橋他訳 2002) では，自己愛性パーソナリティ障害の診断基準は，Table 2 のように記述されている。

Table 2
DSM-Ⅳ-TR の自己愛性パーソナリティ障害診断基準
(American Psychiatric Association, 2000 高橋他訳 2002, p.683-684)

誇大性 (空想または行動における), 賞賛されたいという欲求, 共感の欠如の広範な様式で, 成人期早期までに始まり, 種々の状況で明らかになる。以下のうち, 5 つ (またはそれ以上) によって示される。

1. 自己の重要性に関する誇大な感覚 (例: 業績や才能を誇張する。十分な業績がないにもかかわらず優れていると認められることを期待する)。
2. 限りない成功, 権力, 才気, 美しさ, あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。
3. 自分が“特別”であり, 独特であり, 他の特別なまたは地位の高い人達に (または団体で) しか理解されない, または関係があるべきだ, と信じている。
4. 過剰な賞賛を求める。
5. 特権意識, つまり, 特別有利な取り計らい, または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。
6. 対人関係で相手を不当に利用する, つまり, 自分自身の目的を達成するために他人を利用する。
7. 共感の欠如: 他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしない, またはそれに気づこうとしない。
8. しばしば他人に嫉妬する, または他人が自分に嫉妬していると思い込む。
9. 尊大で傲慢な行動, または態度。

また Raskin & Hall (1979) は，DSM-Ⅲで定義された自己愛性パーソナリティ障害を，一般的な性格傾向として測定しようと試み，Narcissistic Personality Inventory (以下, NPI) を作成した。日本では，宮下・上地 (1985)，大石 (1987)，小塩 (1998, 1999)，佐方 (1986, 1987) が NPI をもとにした尺度を作成している。この NPI は，現在でも最も数多くの研究で用いられている尺度である (小塩, 2011)。しかし，DSM-Ⅲに基づいて

作成されたことから，Kernberg (1975, 1982, 1998 佐野監訳 2003) のいう自己愛性パーソナリティ障害に偏っていることや，健康な自己愛傾向を測定しているという指摘がある (上地・宮下, 2002)。

### (2) 非臨床群における自己愛傾向の 2 類型

Gabbard (1994 舘監訳 1997) が指摘した 2 つの自己愛性パーソナリティ障害のタイプは，臨床場面だけではなく，一般の自己愛傾向においても当てはめられている。Hibbard (1992)，Wink (1991) は，非臨床群を対象とし，自己愛傾向の 2 類型を見出した。以下，Kernberg (1975, 1982, 1998 佐野監訳 2003) のいうような誇大性の目立つ自己愛傾向を誇大型自己愛傾向，Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) のいうような過敏性の目立つ自己愛傾向を過敏型自己愛傾向とする。日本でも一般青年を対象に，自己愛傾向の 2 類型に触れる研究が行われている (例えば，相澤, 2002; 中山, 2006, 2007; 高橋, 1998; 谷, 2004)。また，2 類型をもとにした自己愛傾向のサブタイプも見出されている (中山・中谷, 2006; 小塩, 2004; 清水・川邊・海塚, 2007)。以下に，先行研究における 2 類型をもとにした自己愛傾向のサブタイプを示す。

小塩 (2004) は，自己愛傾向の 2 成分モデルを提唱した。NPI (Raskin & Hall, 1979) をもとに作成された自己愛人格目録短縮版 (NPI-S; 小塩, 1998, 1999) の 3 下位尺度 (「自己主張性」「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」) に対して主成分分析を行った。そして，3 下位尺度に共通する自己愛全体の要素を意味する「自己愛総合」と，「注目・賞賛欲求」と「自己主張」のいずれが優位であるかを意味する「注目―主張」という 2 成分が得られることを示し，この 2 成分によって青年の類型化を行った (Figure 1)。そして，誇大型自己愛傾向に相当する青年は，他者から

の否定的な評価によっても崩れにくい,安定した高い自己肯定感をもち,過敏型自己愛傾向に相当する青年は，他者からの否定的な評価によって崩れてしまうような，不安定で高い自己肯定感をもつことが示されている。

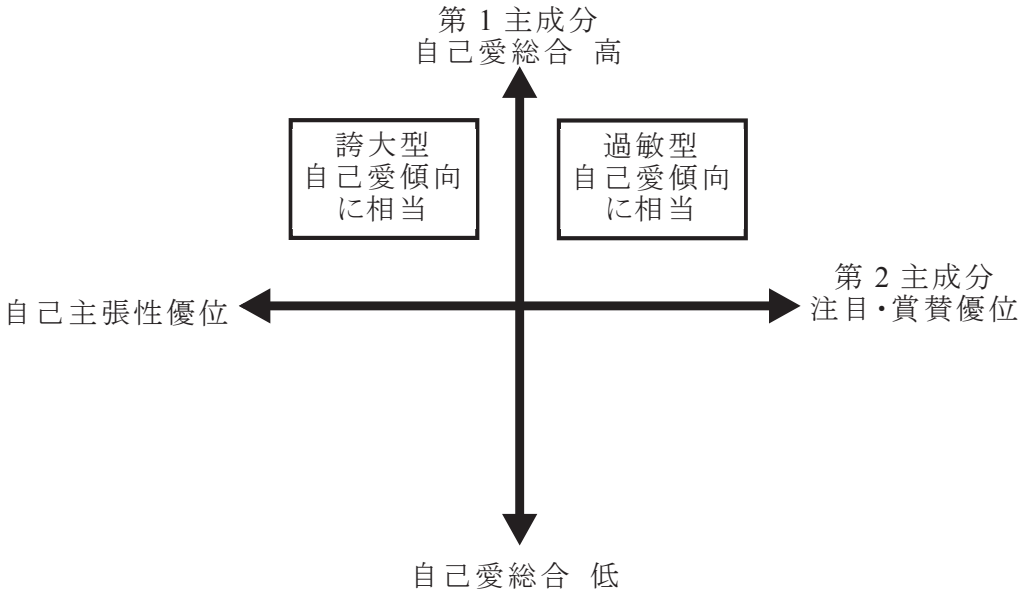


Figure 1. 自己愛傾向の 2 成分モデル
(小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版 より一部変更して引用)

中山・中谷 (2006) は，Gabbard (1994 舘監訳 1997) の自己愛性パーソナリティ障害の 2 つのタイプに基づき，評価過敏性 - 誇大性自己愛尺度を作成した。この尺度は,「誇大性」と「評価過敏性」の 2 下位尺度から構成される。下位尺度の得点を用いて，中学生から大学生までの青年の自己愛傾向を，誇大型 (誇大型自己愛傾向に相当)，過敏型 (過敏型自己愛傾向に相当)，混合型，低自己愛群の 4 群に類型化した。そして，誇大型自己愛傾向に相当する誇大型は，精神的健康が高く，最も適応的であること，過敏型自己愛傾向に相当する過敏型は，精神的健康が低いこ

とが明らかとなった。また，誇大型，混合型に該当する青年の割合は，中学生から高校生にかけて増加し，高校 3 年生付近でピークを迎える。しかし過敏型の割合はは，ほぼ変化がみられないことが示されている。

清水他 (2007) は，NPI-S (小塩, 1998, 1999) で測定した自己愛傾向 (誇大特性次元) を縦軸とし，対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1997) で測定した対人恐怖心性 (過敏特性次元) を横軸とした，対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルを提案した (Figure 2)。対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルでは，両軸の尺度得点が共に平均から±0.5*SD* の範囲にあるものを中間型とし，各尺度得点の強弱によって誇大 - 過敏特性両向型 (過敏型自己愛傾向に相当), 過敏特性優位型, 誇大 - 過敏特性両貧型, 誇大特性優位型 (誇大型自己愛傾向に相当) に分類される。また清水・川邊・海塚 (2008a) では，類型を簡便に判別するため，20 項目からなる対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版 (Two dimensional model of Social phobic tendency and Narcissistic personality Scale-Short version; TSNS-S) を作成している。そして，この 5 類型の自意識と適応性 (清水他, 2007), 性格特性と精神的健康 (清水他, 2008a), 認知特性 (清水・岡村, 2010), ストレス過程 (清水・岡村・川邊, 2010a), 自己概念 (清水・岡村・川邊, 2010b) の検討が行われている。一連の研究結果から，誇大型自己愛傾向に相当する誇大特性優位型は，肯定的な自己概念が強く，他者との協調性を見失わない限りにおいては，適応性が十分発揮できる (清水, 2011)。過敏型自己愛傾向に相当する誇大－過敏特性両向型は，自己信頼の根幹に欠損を持つため自己概念が不安定で，理想自己と現実自己が解離しやすいことが示されている (清水, 2011)。

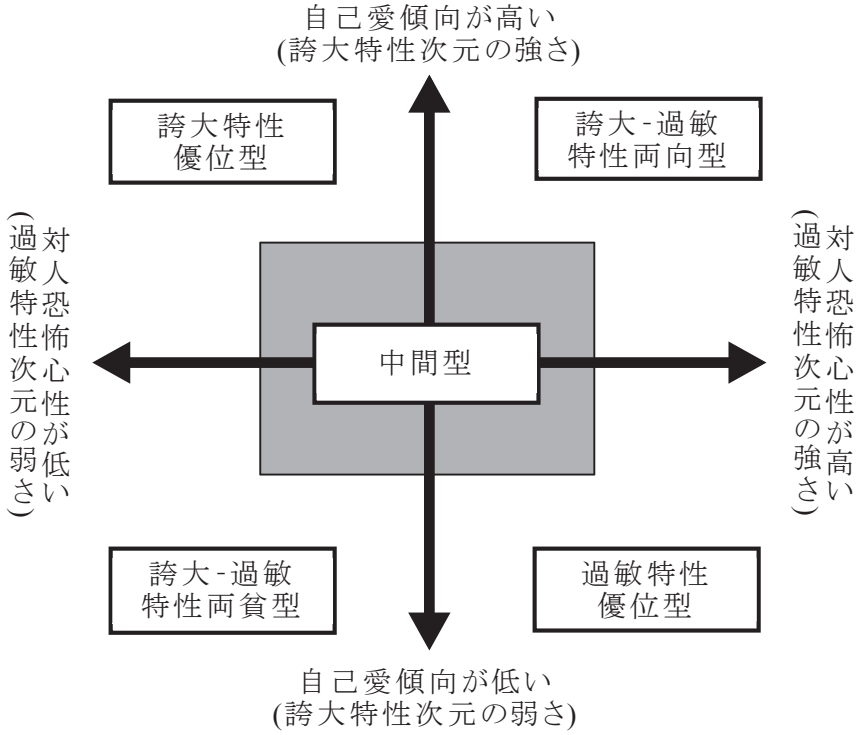


Figure 2. 対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデル
(清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について　心理学研究, **78**, 9-16. より一部変更して引用)

## 4. 自己愛的脆弱性に関する研究の動向

恥や自己抑制への許容度が高い日本の文化では，過敏型自己愛傾向が問題となりやすい (Ronningstam, 2005)。日本の自己愛性パーソナリティ障害の症例は，誇大性よりも，自己評価の低さ，抑うつ感，引きこもりといった形をとりやすく (福井, 1998)，過敏型自己愛傾向の事例が多いと考えられる。また，非臨床群を対象とした先行研究においても，過敏型自己愛傾向の高い青年は精神的健康が低く，完全主義や否定的自己観の高さといった不適応的な認知特性を持つこと (清水・岡村, 2010; 清水他, 2008a, 2010b), 過敏型自己愛傾向が強いほど不安やうつ傾向が高いこと (上地・宮下, 2005) が示されている。以上から，日本では臨床群においても，一般青年を対象とした非臨床群においても，過敏型自己愛傾向

が不適応と関連している。そのため過敏型自己愛傾向に着目していくことは，青年への臨床的援助に有意義と考えられる。

過敏型自己愛傾向を測定する尺度はいくつかみられる。しかし，その内容は，様々な特徴が含まれる過敏型自己愛傾向を包括的に捉えていたり (Hendin & Cheek, 1997; 中山・中谷, 2006; 高橋, 1998)，対人恐怖に関する尺度やモデルを参考に作成している (相澤, 2002; 谷, 2004)。そのため，過敏型自己愛傾向の諸側面を測定しているとは言い難い。過敏型自己愛傾向のモデルを提唱した Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) の理論に基づき，過敏型自己愛傾向の諸側面を考慮した概念に，自己愛的脆弱性 (narcissistic vulnerability) がある。上地・宮下 (2005, 2009) は，自己愛的脆弱性を“自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し，心理的安定を保つ力が脆弱であること”と定義した。そして上地・宮下 (2002, 2005) では，5 下位尺度，40 項目からなる自己愛的脆弱性尺度を作成した。5 下位尺度の内容は，①自己顕示抑制 (自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向)，②自己緩和不全 (不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さ)，③潜在的特権意識 (自分への特別の配慮を求める傾向)，④承認・賞賛過敏性 (周囲からの承認・賞賛に対する過敏さ)，⑤目的感の希薄さである。その後，上地・宮下 (2009) は自己愛的脆弱性尺度の総項目数が多いことから，対象者の負担を考え 20 項目の自己愛的脆弱性尺度短縮版を作成した。その際，⑤目的感の希薄さは，他の 4 下位尺度がいずれも他者への反応にみられる特徴を表現しているのに対し，目的感という個人内的な内容であること，また他の 4 下位尺度との相関が非常に低いことから削除した。

以上から日本の青年理解を深めるためには，自己愛的脆弱性に着目す

る必要性がある。自己愛的脆弱性のサブタイプを見出し，サブタイプの特徴を実証的に分析し，発展させることで，一般青年の自己愛的脆弱性への査定的な資料に加え，該当する臨床群への治療的示唆が得られる。

## 第 2 節　Kohut の自己の発達に関する研究の動向

### 1.　Kohut による自己の発達論

自己愛には独自の発達ラインがあると考えた Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) は，自己愛だけでなく，自己そのものの発達を想定した。その内容を以下に示す。

#### (1) 自己対象体験

Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) によると，個人は生涯，自己対象体験を必要としている。この自己対象体験とは，特定の人物や対象を示すのではなく，これらの対象によって喚起される，自己を支えるために必要な体験を意味する (Wolf, 1988 安村他訳 2001)。Kohut は，鏡映自己対象体験，理想化自己対象体験，双子自己対象体験の 3 つの自己対象体験があるとした。鏡映自己対象体験は，自分自身が表出した行動や感情を映し返してもらうことで自己が承認される体験である。理想化自己対象体験は，理想化した対象と融合することで安心感がもたらされる体験である。双子自己対象体験は，自己と対象の間に類似性や共通性を感じる体験である。Wolf (1988 安村他訳 2001) は，この 3 つの自己対象体験に，対立自己対象体験と効力感の体験を加えている。対立自己対象体験は，対象からの支持的な応答を失うことなく，対象に立ち向かう体験である。効力感の体験は，自らが必要な自己対象体験を，対象から引き起こすことができる体験である。これらの自己対象体験は，発達に伴い，融合の特質が強い原始的な自己

対象体験から成熟した自己対象体験へと形を変えるものの，生涯を通して必要とされる。

### (2) 自己の発達

Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995) は，乳児はまとまった自己を持っておらず，断片的な自己の状態であるとした。しかし，養育者との自己対象体験を通じて，断片的な自己がまとまりを形成し，しだいに凝集していく。そして幼児期には，中核自己と呼ばれる中心的な構造が形成される。この時期の幼児は，2 つの自己愛的構造が形成される。1 つは誇大自己であり，自分は完全だと感じ，そうなりたいという欲求である。もう 1 つは，理想化された親像であり，理想化した親のイメージを心の中にもつことで，自分を万能な親の一部であると思うことである (上地, 2004)。

この 2 つの自己愛的構造は，主に養育者である親とのやり取りの中で発達・変容していく。幼児期の誇大自己は，自慢などの自己顕示的な態度となって表れる。養育者が，幼児の自己顕示的な態度を承認，賞賛する対応は，幼児にとって，自分の価値を映し出してくれる鏡映自己対象体験となる。十分な鏡映自己対象体験があると，誇大自己は，安定した自尊感情，自尊感情調整能力，野心へと変容する。養育者を理想化し，理想化した養育者と一体化することで心理的安定を得る理想化自己対象体験が十分にあると，健全な理想や，自分で心理的安定をもたらす力である自己緩和能力が形成される (上地, 2004, 2011)。また，この時期には，養育者と同じでありたいという欲求である双子欲求が生じる。養育者との間で，十分な双子自己対象体験があると，幼児の技能を高め，才能を開発することにつながると言われる (上地, 2004; 中西, 1991)。

以上のように，自己が発達していく過程には，自己対象体験が重要で

ある。加えて，養育者との間に，発達に応じた適量の欲求不満があることも重要とされている。Kohut (1971 水野他監訳 1994) によると，養育者との十分な自己対象体験があったうえで，子どもの発達に応じた適量の欲求不満を与えることにより，これまで養育者が担っていた，自己を安定化するための諸機能が内在化される。これを，変容性内在化と呼ぶ。適量の欲求不満とは，外傷的ではない程度で，養育者が子どもの欲求に対して反応や共感を失敗するなどにより，子どもが親へ失望する体験である。母親の不在や満足遅延など，養育上，不可避な体験が含まれる (上地, 2004)。この変容性内在化は，児童期・思春期頃に始まり，青年期後期に達成するとされている (近藤, 2009)。変容性内在化を経ると，自律的に心理的安定を維持することが可能となる。自己対象体験は変わらず必要とするものの，以前のように，養育者との融合の特質が強い，原始的な自己対象体験は必要としなくなり，養育者以外の様々な人や，環境，象徴へと対象は変遷し，成熟した形へと発達していく。

### (3) 自己の障害

自己の発達の過程で，自己対象体験が不十分であったり，変容性内在化がうまくいかないと，自尊感情調節能力や自己緩和能力のような内的構造の欠損から，自己愛的な傷つきやすさが顕著になる。誇大自己に対する鏡映自己対象体験が不十分であると，自尊感情調節の困難さが生じ，少しのことで自尊心が傷つき，激しい自尊心低下が生じる。加えて，未熟な誇大自己が抑圧されたまま残存しており，自己顕示欲求に伴う強い恥の感情，自意識過剰，誇大性，興奮などが生じる。また養育者の不十分な対応によって，子どもの自己が損傷を受けた場合，傷つけられる不安から，自己の承認や尊敬を求める欲求を意識から排除しようとする。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995) は，これを「水

平分割 (horizontal split)」と呼んだ (Figure 3)。自己の障害を持つ人が，自信に乏しく，傷つきやすい基底には，抑圧された自己対象体験への未成熟な欲求が潜んでいる。その一方で，自己の障害を持つ人は，ある面では誇大的な自己像を持っていることがある。これは，優越的態度や特別の配慮を求める傾向など分かる形で現れることもあるが，高すぎる目標の追求などの背後に潜んでいることもある。この誇大性は対人関係の困難の原因になる。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995) によると，この誇大性は，自己の障害を生み出した養育者との関係において育ったものである。養育者が，子どもの特性や能力の一部を自己愛的に賞賛したために,その部分が誇大的に強調されるようになる。本人は，自分の言動が誇大的であり，他人に不快感を与えるということには気づかない。このように，同じ自己のなかに誇大的な部分と自己評価の低さや空虚感という矛盾するものが併存していることを,「垂直分割 (vertical split)」という (上地, 1997, 2011)。

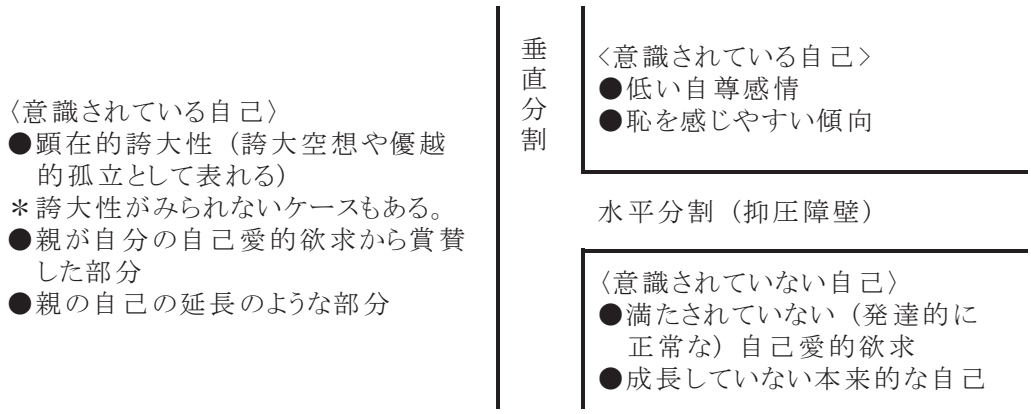


Figure 3. 自己の分割 (上地, 2011, p. 41, 図 3-1)

また，理想化された親イメージがうまく内在化されないと，理想システムの障害が生じ，内的な基準や理想に従って自分を方向づけることが

できない。理想化された親像を現実の他の人物に投影し，その人物からの承認や尊敬を強く求め，常に不安や緊張などを鎮めてもらい，自分を方向づけ導いてもらったりしないと安心できない。そして，このような外的な人物からの応答により，自己の心理的な安定や自己評価が左右されるという心理構造が生まれる (上地, 1997, 2011)。

以上から, 発達早期から養育者をはじめとする環境から受ける体験が, 自己愛の発達に影響を与えると言える。しかし Kohut の理論は，長年の臨床実践から生まれたものであり，実証的な検討が十分なされているとはいえない。

## 2. 自己愛傾向と他の発達理論との関連に関する研究の動向

Kohut の理論と同様，発達早期から環境との関係を重視し，豊富な実証研究，縦断研究の蓄積がある理論に Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) の精神分析的心理社会的発達論や，Bowlby (1953, 1969 黒田他訳 1976) の愛着理論がある。以下に，両理論と自己愛傾向との関連を示す。

### (1) 自己愛傾向と精神分析的心理社会的発達論との関連

精神分析的心理社会的発達論は，Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) により提唱された理論である。Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) は，人生を第 I 段階 (乳児期) から第Ⅷ段階 (老年期) の 8 つの発達段階に分け，各発達段階に顕著な心理社会的課題を示した。この心理社会的課題を達成するためには，乳児期には母親的な養育者，幼児期には両親や家族，児童期には学校内の人間，青年期には仲間グループといった，環境との関係が重要な役割をもつ。また，この 8 つの心理社会的課題は，生涯を通して発達する。特に，乳児期に顕著となる基本的信頼感 対 基本的不信感の課題は，後に続く全ての心理社的課題の基盤であり，また幼児期以降の児童期，青年期，成人期，老年期においても発達する (Erikson,

Erikson, & Kivnick, 1986 朝長他訳 1990)。その発達過程は，深瀬・岡本 (2012) により実証されている。縦断研究を行った清水 (1999) によると，発達早期に形成された自己信頼感は，青年期においても比較的安定したものであることが示されている。

さて，小此木 (1981) によると，健康な自己愛を身につけた人間は，それ以後の人生でさまざまな困難や不信を経験しても，人間に対する信頼と，自己自身に対する信頼を抱き続けることができ，人間と自己に対する希望と信頼を最後まで失わない自我の強さを保ち続けることができる。また藤原 (1981) は，健康な自己愛こそ自我の自律的発達の基礎であると考え，このような自己愛が対象関係の中での相互一致の感覚，その普遍性と連続性の体験を通してアイデンティティの基礎になるとした。以上から，安定した対象との体験で満たされた自己愛は，自我が機能し発達していくための源泉であり，アイデンティティの確立を支えるといえる。

非臨床群の青年を対象に，自己愛傾向とアイデンティティの関連を検討した実証研究はいくつかみられる (原田, 2012; 上地・宮下, 2002; 三船・氏原, 1991; 中山, 2006; 清水・川邊・海塚, 2008b)。これらの研究では，誇大型自己愛傾向はアイデンティティの形成を促進するが，過敏型自己愛傾向はアイデンティティの拡散と関連することが示唆されている。しかし，いずれの研究においても，アイデンティティに関して Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) の 8 つの心理社会的発達段階のうち，第 5 段階のアイデンティティ 対 アイデンティティ拡散のみを扱っている。社会との関わりの中で，個人が各段階の発達的危機をどのくらい健全に切り抜け，どの程度の達成感覚を身につけているかという視点から捉えた研究はみられない。上述したように，自己愛傾向とアイデンティティは

密接に関連しており，両者は個人の発達に伴い，互いに影響を与えながら育まれていくと考えられる。そのため，両者の関連を検討するためには，第 5 段階だけでなく，その他の段階の達成感覚との関連も含めて検討する必要がある。

### (2) 自己愛傾向と愛着理論との関連

愛着理論は，Bowlby (1953, 1969 黒田他訳 1976) によって提唱された理論である。人は幼児期に主要な愛着対象との間で経験された相互作用を通して，自分の周囲の世界や自己及び他者に関する心的表象 (内的作業モデル) を形成する。内的作業モデルに基づき，その後の出来事の知覚，未来の予測，行動を決定する。このような内的作業モデルに基づく典型的な行動パターンが愛着スタイルである。

乳児の愛着の形成に関しては，養育者の感受性が関連していることが示されており (Biringen, 1990; 斉藤, 2000; Van IJzendoorn & De Wolff, 1997; Ward & Carlson, 1995)，発達早期の環境が，安定した愛着の形成に影響を与えていることが分かる。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) は，母親との分離・再会時における幼児の行動パターンを観察する実験観察法により，愛着スタイルの 3 分類を見出した。3 分類とは安定型 (母親との分離に対して感情的な行動を取るが，母親との再会で落ち着く) と，2 種類の不安定型 (回避型; 母親との分離・再会に無関心であったり，回避的行動を示す。アンビバレント型; 母親との分離に強い不安を示し，再会後も気分が回復しない) である。その後 Hazan & Shaver (1987) は，自己報告による単一項目強制選択法の質問紙調査により，愛着スタイルの 3 分類が，幼児期だけでなく青年や成人においても同様に認められることを示した。詫摩・戸田 (1988), 戸田 (1988) は，Hazan & Shaver (1987) に基づき，「安定」「アンビバレント」「回避」の 3 下位尺度から構成され

る多項目の成人版愛着スタイル尺度を作成している。また近年は，幼少期から青年期に至る長期の縦断研究が行われている (Hamilton, 2000; Lewis, Feiring, & Rosenthal, 2000; Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim, 2000; Weinfield, Stroufe, & Egeland, 2000)。これらの縦断研究の結果は，必ずしも一致したものではないが，発達早期の愛着の質と，その後の愛着との連続性を支持する報告が多くなされている (山岸, 2013)。

自己愛と愛着理論のいずれも，発達早期の養育者との関係を重視しているが，これまで主として，前者は力動臨床心理学，後者は発達心理学という領域で研究されてきた。しかし近年は両概念の関連が指摘されており (Fonagy, 2001 遠藤他監訳 2008; Pistole, 1995)，実証的に自己愛傾向と愛着スタイルとの関連を検討した研究もみられる。Brennan & Shaver (1998) は，大学生を対象に自己愛性パーソナリティ障害傾向と不安定な愛着スタイルとの間に正の関連があることを示した。また Smolewska & Dion (2005) は，大学生を対象に，自己愛傾向の 2 類型と愛着スタイルとの関連を検討し，過敏型自己愛傾向の方が，誇大型自己愛傾向よりも不安定な愛着スタイルと関連することを示した。しかし Smolewska & Dion (2005) の研究では，過敏型自己愛傾向の諸側面を考慮しておらず，過敏型自己愛傾向を包括的に捉えている。また日本では，自己愛傾向と愛着スタイルの関連を実証的に検討した研究はみられない。

### 3. 自己愛傾向と自己対象体験の関連に関する研究の動向

Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) の理論では，自己対象体験が自己の形成に不可欠であること，また自己の形成に伴い，自己対象体験自体も発達していくことを述べた。自己対象体験について，Kohut (1984 本城他監訳 1995) は，個人のこれ

までの人生すべての段階の自己対象体験は，現在の自己対象体験の無意識的な基底を形成するとしている。つまり，青年の自己愛傾向には，発達早期から現在までの自己対象体験が関連していると考えられる。また，自己対象体験には，無意識的な側面も含まれる。以下に，青年期の自己愛傾向と自己対象体験との関連を検討した先行研究を概観する。

**(1) 自己愛傾向と現在の自己対象体験との関連**

Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) のいう自己対象体験を実証的に捉えようと，自己対象体験を測定する尺度がいくつか作成されている (Banai, Mikulincer, & Shaver, 2005; 小林, 2006; 緒賀, 2001; 白井, 2005 )。このうち Banai et al. (2005), 緒賀 (2001), 白井 (2005) は，大学生を対象に自己対象体験と自己愛傾向の関連を検討した。

Banai et al. (2005) では，Kohut の理論に基づき，自己対象体験への欲求と自己対象体験を回避する傾向を測定する尺度を作成した。下位尺度は,「鏡映自己対象体験への欲求」「理想化自己対象体験への欲求」「双子自己対象体験への欲求」「鏡映自己対象体験の回避」「理想化/双子自己対象体験への回避」である。これらと，NPI (Raskin & Hall, 1979) による自己愛傾向の関連を検討し,「鏡映自己対象体験への欲求」と「理想化/双子自己対象体験への回避」が自己愛傾向と正の相関がみられることを示した。自己愛傾向の測定に用いられた NPI は，誇大型自己愛傾向や健康な自己愛傾向を測定しているという指摘がある (上地・宮下, 2002)。

緒賀 (2001) は,「鏡映自己対象関係体験」「理想化自己対象関係体験」「双子自己対象関係体験」の 3 下位尺度からなる自己対象体験尺度を作成した。そして，自己対象体験尺度と NPI をもとにした自己愛尺度 (宮下・上地, 1985) の関連を検討したが，関連は認められなかった。

白井 (2005) は,「鏡映への期待」「鏡映への失望」「理想化への期待」「理想化への失望」「分身の欲求」の 5 下位尺度からなる自己対象体験尺度を作成し, Kohut 理論に基づいた葛西 (1999) の自己愛尺度との関連を検討した。葛西 (1999) の自己愛尺度は,「他者からの承認への依存」「自己の誇大化」「他者との同調」の 3 下位尺度からなる。結果は,「鏡映への期待」と「自己の誇大化」,「鏡映への失望」と「他者への同調」,「理想化への期待」と「他者からの承認への依存」,「理想化への失望」と「他者への同調」,「分身の欲求」と「他者からの承認への依存」「他者への同調」に, 正の相関が認められた。しかし葛西 (1999) の尺度は, Kohut の理論のなかでも誇大性の側面が強調されているという指摘がある (上地・宮下, 2002)。

また白井 (2006) では, 自己対象体験尺度 (白井, 2005) と高橋 (1998) のナルシシズム尺度との関連を検討している。高橋 (1998) のナルシシズム尺度は,「周囲を気にかけない誇大的なナルシシズム」と「周囲を過剰に気にする傷つきやすいナルシシズム」の 2 下位尺度からなる。前者は誇大型自己愛傾向, 後者は過敏型自己愛傾向を測定している。結果は,「鏡映への期待」は「周囲を気にかけない誇大的なナルシシズム」と正の相関,「鏡映への失望」「理想化への期待」「理想化への失望」「分身欲求」は「周囲を過剰に気にする傷つきやすいナルシシズム」と正の相関が認められた。

以上から, 誇大型自己愛傾向は, 鏡映自己対象体験への欲求や期待との関連がみられるものの, 過敏型自己愛傾向は, 一貫した結果は得られていない。これは, 先行研究で用いられた自己愛傾向を測定する尺度が, Kohut の理論を十分に反映した尺度でないことが背景にあると考えられる。そのため, 自己対象体験と自己愛傾向の関連を検討する際には, Kohut

の理論に基づいた自己愛傾向を測定する必要がある。

### (2) 自己愛傾向と親との自己対象体験との関連

発達早期に自己対象体験をもたらす対象は，養育者である親と考えられる。非臨床群の青年を対象に，主観的評価によって，これまでの親の養育態度と自己愛傾向との関連を検討した研究がいくつかみられる (原田, 2005; Miller & Campbell, 2008; 宮下, 1991; Otway & Vignoles, 2006; 清水・海塚, 2004)。これらの研究では，自己愛傾向を測定する尺度が異なることや，回顧法という手法を用いていることから一貫した結果を導くことが困難であると指摘されている (川崎, 2011)。しかし，回顧法という手法の問題の前に，上述した先行研究は全て質問紙調査で行われていることから，全体的傾向をおおまかに捉え，見落とされた側面があるのではないだろうか。青年がこれまでの親との関係をふり返る時，そこには簡単には言い表せない様々な体験や感情が含まれる。そのため複雑なプロセスや，幾層にも重なり時間的に広がりがある体験の意味を扱うことが可能な質的研究 (岩壁, 2010) を用いて捉える必要がある。

原田 (2006) は半構造化面接を行い，それまでの人生における自己対象体験が，青年の自己確立・自己形成をどのように支えているか質的に検討した。その結果，親との自己対象体験が十分であると，その後の自己対象体験の発達が生じ，自己確立・自己形成が生じる。一方，不十分な側面が存在するほど，それを補う自己対象体験が必要となり，自己確立・自己形成の過程が遅れることを示した。しかし原田 (2006) では，親との自己対象体験を自己支持的な部分の有無のみで検討しており，自己対象体験の内容が検討されていない。また，これらの青年の自己愛傾向がどのような状態であるか不明である。そのため青年の自己愛傾向が，どのような親との自己対象体験の中で形成されてきたか検討する必要が

ある。

### (3) 自己愛傾向と自己対象体験の無意識的側面との関連

Leibowitz (1999 菊池他訳 2002) は，家・木・男の人・女の人・動物を画用紙 1 枚ずつに描く描画法の理解を，Kohut の理論から試みた。そして，異性の人物像には自己対象体験に関する特徴が表れるとした。Leibowitz (1999 菊池他訳 2002) の課題を画用紙 1 枚ずつに描く描画法に対して，近藤 (2009) は，1 枚の画用紙に複数の人物像を描く描画法の方が，自己対象体験を捉えるうえでは適しているとした。複数の人物像の特徴と，その相互作用に着目することで，自己が，これまでどのような自己対象体験をしてきたか，無意識的な側面を含めて投映されると考えられる。近藤 (2009) では，1 枚の画用紙に，家・木・男の人・女の人を描く，S-HTPP 法 (近藤, 2006) を用い，非臨床群の青年の自己愛傾向と自己対象体験の無意識的側面について検討した。その結果，人物像の相互交流が描かれるのは,過敏型自己愛傾向も誇大型自己愛傾向も低い,健康な自己愛の状態と考えられる青年の場合が多かった。

1 枚の画用紙に複数の人物像を描く母子画 (Gillespie, 1989) や家族画は，人物像の特徴と相互作用に，描き手の対象関係や家族関係が反映されることが明らかになっている (近藤, 2009)。Gillespie (1989) が考案した母子画 (Mother and Child Drawings) は，1 枚の画用紙に，母親像と子ども像を描く描画法であり，対象関係論を理論的背景としている。母子画の母親像と子ども像は，内的世界の自己と対象を表象し，母親像と子ども像の交流が自己と対象の交流を象徴する。そしてそれが投映されたものが現実の対人関係であると考える。母子画に表現された母親像と子ども像の関係，つまり描き手の心の中に住む母親と子どもの関係を読み取ることにより，被検者の対象関係を理解する (馬場, 2005)。また

Gillespie (1994 松下他訳 2001) によると，母子画には，描き手の自己認知や他者の受け止め方，他者との関係様式が反映されており，自己の体験と重要な人物との関係を通しての体験の両方についてのメッセージを伝えるものとして検討できる。

松下・石川 (1999) では，小学生群，中学生群，大学生群に，母子画を実施した。その結果，子ども像 対 母親像の相対的な大きさの比率は，大学生群ほど小さくなる傾向がみられた。小学生群では単純で現実的な母親を描こうとする傾向があったが，大学生群では現実の母子関係ではなく，過去の母親イメージや一般的な母親概念を描いていた。そのため，大学生を対象とした母子画では，現実の母子関係ではなく，対象関係を投映していると考えられる。また馬場 (2005) は，Gillespie (1994 松下他訳 2001) の母子画には個人の対象関係が投映されるという仮説を検証するため，対象関係の測定法として成人版愛着スタイル尺度 (戸田, 1988) を利用して愛着スタイルを測定し，母子画にどのように表現されるかを検討した。その結果，安定した愛着対象との絆が，母親像と子ども像の「身体接触」や「交流」という形で表現されることが示された。これは，個人の対象関係が母子画に投映される可能性を示唆している。しかし性差が認められたことから，母子画には発達早期の母子相互作用の中で培われた対象関係の核の部分と，それを基礎としながら，その後の体験や発達段階の影響を受けながら形成される部分の両方が投映される (馬場, 2005)。

対象関係と自己対象体験は，理論的に異なる背景を持つ。しかし，母子画が実際の対人関係ではなく内的世界の自己と対象の関係を表象する点，体験や発達段階の影響を受けながら自己と対象の関係が変容する点は，関係性によって生じる機能の主観的体験を意味する自己対象体験と

共通する点と考えられる。以上から，発達早期からの自己対象体験の無意識的側面を捉えるには，母子画の使用が有効と考えられる。

### 第 3 節　本研究の目的

これまで論じたように, 日本の文化では, 自己愛傾向の 2 類型のうち, 臨床群においても非臨床群においても過敏型自己愛傾向が問題となりやすい (福井, 1998; 上地・宮下, 2005; Ronningstam, 2005; 清水他, 2008a; 清水・岡村, 2010)。そのため，日本の青年理解を深めるためには，過敏型自己愛傾向に着目する必要がある。本研究では，過敏型自己愛傾向のモデルを提唱した Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) の理論に基づいた自己愛的脆弱性 (上地・宮下, 2005, 2009) の視点から，過敏型自己愛傾向を捉える。そして，非臨床群の青年の自己愛的脆弱性のサブタイプを見出し，サブタイプの特徴を実証的に分析し，発展させる。これにより，一般青年の自己愛的脆弱性への査定的な資料に加え，該当する臨床群への治療的示唆が得られる。

また，Kohut の理論では，発達早期から養育者をはじめとする環境から受ける自己対象体験が，自己愛傾向の発達に影響を与える。しかし Kohut の理論は，長年の臨床実践から生まれたものであり，実証的な検討は十分ではない。そこで青年の自己愛的脆弱性と，Kohut の理論と同様，発達早期から環境との関係を重視し，豊富な実証研究，縦断研究の蓄積がある理論や，これまでの自己対象体験との関連を検討する。

以上より，本研究の目的は次の 3 点である。①青年期の非臨床群の自己愛的脆弱性を下位尺度の組合せで類型化することで，自己愛的脆弱性のサブタイプを見出す (研究 1)。これによりサブタイプ間の相違についての言及が可能となるため，この類型化にもとづき自己愛的脆弱性の質

的な違いについて検討を行う。②自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚および愛着スタイルとの関連を検討する (研究 2)。③自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連を検討する (研究 3)。

# 第 2 章　自己愛的脆弱性による青年の類型化 (研究 1)

## 1.　目的

自己愛的脆弱性を下位尺度の組合せで類型化し，自己愛的脆弱性のサブタイプについて検討する。

## 2.　方法

### (1) 対象者

大学生 234 名 (男性 105 名，女性 129 名)，平均年齢 20.59 歳，標準偏差 1.07 歳であった。

### (2) 調査手続き

講義時間終了後に無記名式の質問紙を配布し，その場で回答を依頼した。なお，質問紙配布時に広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の規定に従って，質問紙への回答は任意であること，回答を途中でやめてもよいこと，本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明した。その上で，質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。

### (3) 調査内容

**自己愛的脆弱性**　上地・宮下 (2009) の自己愛的脆弱性尺度短縮版 (以下，NVS 短縮版) を用いた。本尺度は，「自己顕示抑制 (項目例: 人と話した後に『あんなに自分を出すのではなかった』と後悔することがある)」「自己緩和不全 (項目例: 悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと，私は生きていけないと思う)」「潜在的特権意識 (項目例: 他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので，腹が立つことがある)」「承認・賞賛過敏性 (項目例: 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと，そのことが気になってしかたがない)」

の 4 下位尺度で構成される。“まったくない (1 点)”〜“よくある (5 点)” の 5 段階評定であり，得点が高いほどその要素が強いことを示す。全 20 項目からなる。

## 3. 結果

### (1) 測定尺度の検討

NVS 短縮版について，探索的因子分析 (主因子解－Promax 回転) を行った結果，上地・宮下 (2009) と同じ 4 因子を抽出したため，同様の 4 下位尺度を用いた。各下位尺度の $\alpha$ 係数は「自己顕示抑制」$\alpha$＝.83,「自己緩和不全」$\alpha$＝.86,「潜在的特権意識」$\alpha$＝.86,「承認・賞賛過敏性」$\alpha$＝.82 であり，高い内的整合性が確認された。

### (2) 自己愛的脆弱性による類型化

NVS 短縮版の 4 下位尺度得点を標準化し，非階層法によるクラスタ分析を行い，下位尺度の特徴を最もよく表す 4 クラスタを採用した (Figure 4)。4 下位尺度得点全てが各下位尺度の平均値より低い群を NV 低群 ($n$=48),「自己顕示抑制」が低く「自己緩和不全」が高い群を自己緩和困難群 ($n$=83)，4 下位尺度得点全てが高い群を NV 高群 ($n$=38),「自己顕示抑制」が高く「自己緩和不全」が低い群を抑制優位群 ($n$=65) と命名した。

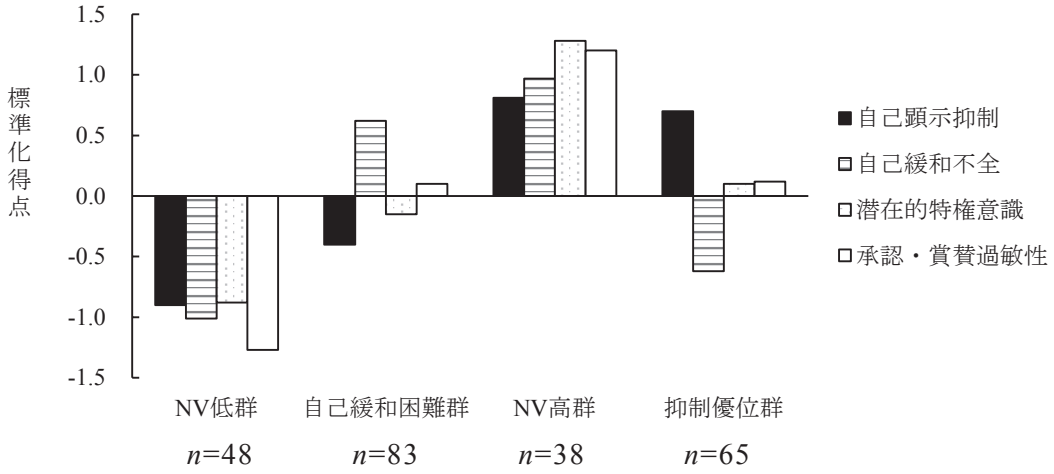


Figure 4. NVS 短縮版の下位尺度の組合せによる自己愛的脆弱性のサブタイプ

また各クラスタの特徴を調べるために，クラスタを独立変数，NVS 短縮版の下位尺度を従属変数とする 1 要因分散分析を行った (Table 3)。その結果，主効果は 4 下位尺度全てにおいて有意となった (自己顕示抑制; $F$ (3, 230)＝66.47, 自己緩和不全; $F$ (3, 230)＝117.68, 潜在的特権意識; $F$ (3, 230)＝58.97, 承認・賞賛過敏性; $F$ (3, 230)＝101.89, いずれも, $ps < .01$)。多重比較 (Tukey 法) の結果,「自己顕示抑制」は，NV 高群と抑制優位群が NV 低群と自己緩和困難群より有意に高かった。また自己緩和困難群は，NV 低群より有意に高かった。「自己緩和不全」は，NV 高群が NV 低群，抑制優位群，自己緩和困難群より有意に高かった。自己緩和困難群は，NV 低群と抑制優位群より有意に高かった。抑制優位群は，NV 低群より有意に高かった。「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」は，NV 高群が NV 低群，自己緩和困難群，抑制優位群より有意に高かった。自己緩和困難群と抑制優位群は，NV 低群より有意に高かった。

Table 3
研究 1 での自己愛的脆弱性サブタイプの NVS 短縮版下位尺度得点の比較

| | NV 低群 | 自己緩和困難群 | NV 高群 | 抑制優位群 | $F$ (3, 230) | 多重比較 (Tukey 法) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | | |
| 自己顕示抑制 | 2.63 (0.65) | 3.03 (0.54) | 4.00 (0.55) | 3.91 (0.62) | 66.47** | 低 < 困難 < 抑制, 高 |
| 自己緩和不全 | 2.19 (0.66) | 3.70 (0.59) | 4.02 (0.64) | 2.55 (0.49) | 117.68** | 低 < 抑制 < 困難 < 高 |
| 潜在的特権意識 | 2.00 (0.57) | 2.56 (0.53) | 3.66 (0.70) | 2.75 (0.58) | 58.97** | 低 < 困難, 抑制 < 高 |
| 承認・賞賛過敏性 | 2.06 (0.54) | 3.19 (0.49) | 4.11 (0.60) | 3.21 (0.58) | 101.89** | 低 < 困難, 抑制 < 高 |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
注 2) 多重比較において，低＝NV 低群; 困難＝自己緩和困難群; 高＝NV 高群; 抑制＝抑制優位群。
**$p$ < .01

### (3) 先行研究との比較

自己愛的脆弱性サブタイプの特徴を，研究 1 の対象者内のみでなく，同一尺度を用いた先行研究との比較によって検討するため，大学生 460 名を対象にした先行研究 (上地・宮下, 2009) の NVS 短縮版下位尺度得点と，自己愛的脆弱性サブタイプの下位尺度得点を比較した ($t$ 検定, Welch の検定; Table 4)。その結果，NV 低群は先行研究と比較して，4 下位尺度得点全てが有意に低かった (自己顕示抑制; $t$ (67.56) = 3.08, 自己緩和不全; $t$ (66.02) = 7.00, 潜在的特権意識; $t$ (506) = 6.17, 承認・賞賛過敏性; $t$ (69.51) = 14.66, いずれも $p$s < .01)。自己緩和困難群は先行研究と比較して,「自己緩和不全」が有意に高く,「承認・賞賛過敏性」は有意に低かった (自己緩和不全; $t$ (157.72) = 10.13, $p$ < .01, 承認・賞賛過敏性; $t$ (167.34) = 2.27, $p$ < .05)。NV 高群は先行研究と比較して，4 下位尺度得点全てが有意に高かった (自己顕示抑制; $t$ (54.96) = 10.52, 自己緩和不全; $t$ (49.30) = 9.73, 潜在的特権意識; $t$ (496) = 9.15, 承認・賞賛過敏性; $t$ (496) = 5.84, いずれも $p$s < .01)。抑制優位群は先行研究と比較して,「自己顕示抑制」が有意に高く,「自己緩和不全」は有意に低かった (自己顕示抑制; $t$ (106.93) = 10.87, 自己緩和不全; $t$ (133.36) = 5.03, いずれも $p$s

< .01)。

Table 4
研究 1 での自己愛的脆弱性サブタイプと
先行研究 (上地・宮下, 2009) の対象者との比較

| | 上地・宮下 (2009) | NV 低群 | 自己緩和困難群 | NV 高群 | 抑制優位群 |
|---|---|---|---|---|---|
| 自己顕示抑制 | 2.95 (0.91) | 2.63 (0.65)** | 3.03 (0.54) | 4.00 (0.55)** | 3.91 (0.62)** |
| 自己緩和不全 | 2.92 (0.89) | 2.19 (0.66)** | 3.70 (0.59)** | 4.02 (0.64)** | 2.55 (0.49)** |
| 潜在的特権意識 | 2.62 (0.67) | 2.00 (0.57)** | 2.56 (0.53) | 3.66 (0.70)** | 2.75 (0.58) |
| 承認・賞賛過敏性 | 3.34 (0.79) | 2.06 (0.54)** | 3.19 (0.49)* | 4.11 (0.60)** | 3.21 (0.58) |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
* $p < .05$，** $p < .01$

## 4. 考察

研究 1 は，青年の自己愛的脆弱性を下位尺度の組合せで類型化し，自己愛的脆弱性のサブタイプについて検討することを目的とした。クラスタ分析の結果，NV 低群，自己緩和困難群，NV 高群，抑制優位群の 4 つのサブタイプが得られた。各サブタイプの NVS 短縮版の 4 下位尺度を，研究 1 の対象者内，先行研究 (上地・宮下, 2009) と比較を行った。その結果から得られた，各サブタイプの自己愛的脆弱性の特徴を述べる。

NV 低群は, 研究 1 の対象者内での比較, 先行研究との比較において, NVS 短縮版 4 下位尺度得点すべてが低かった。これより，この群の青年は, 緊張や不安を自分で緩和する力があり, 心理的安定を保つ力がある。他者から特別な配慮を求める傾向や，承認・賞賛への過敏さ，自己表現を抑制する傾向は低い。健康な自己愛傾向をもつ群と考えられる。

自己緩和困難群は, 研究 1 の対象者内での比較において,「自己緩和不全」が NV 高群に次いで高かった。また先行研究と比較して,「自己緩和不全」が高く,「承認・賞賛過敏性」は低かった。「自己顕示抑制」「潜在

的特権意識」では，有意差は認められなかった。以上からこの群の青年は，承認や賞賛への過敏さは低く，周囲に自分を表現することに抵抗はないが，傷つきを独りで処理することができないという自己愛傾向の脆弱さをもつ群と考えられる。

NV 高群は，研究 1 の対象者内での比較，先行研究との比較において，NVS 短縮版 4 下位尺度得点すべてが高かった。これより，この群の青年は，傷つきを自分で抱えられず，周囲からの配慮を求めるが，周囲の反応に過敏で自分を出すことを抑える。自己愛的脆弱性の全ての特徴をもつ群と考えられる。

抑制優位群は，研究 1 の対象者内での比較において，「自己顕示抑制」が高かった。先行研究と比較して，「自己顕示抑制」が高く，「自己緩和不全」は低かった。以上からこの群の青年は，傷つきを人に話すことなく自分で処理しようとする力はあるが，周囲に自分を表現した後には自分を出しすぎたのではないかと，自己表現を抑えるという自己愛傾向の脆弱さをもつ群と考えられる。

# 第 3 章　自己愛的脆弱性と心理社会的課題および愛着スタイルとの関連 (研究 2)

## 第 1 節　自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連 (研究 2-1)

### 1.　目的

自己愛的脆弱性と，Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) の心理社会的課題の達成感覚との関連を検討する。まず，特性としての自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚の関連を検討する。次に，自己愛的脆弱性サブタイプが，心理社会的課題の各段階の達成感覚をどの程度身につけているか特徴を見出すことで，両者の関連を検討する。

### 2.　方法

#### (1) 対象者

研究 1 と同じ大学生 234 名 (男性 105 名，女性 129 名), 平均年齢 20.59 歳，標準偏差 1.07 歳であった。

#### (2)　調査手続き

研究 1 の質問紙調査の際に，併せて調査を行った。講義時間終了後に無記名式の質問紙を配布し，その場で回答を依頼した。なお，質問紙配布時に広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の規定に従って，質問紙への回答は任意であること，回答を途中でやめてもよいこと，本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明した。その上で，質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。

#### (3) 尺度

**心理社会的課題の達成感覚**　中西・佐方 (2001) のエリクソン心理社会的段階目録検査 (以下, EPSI) を用いた。本尺度は「信頼性 (項目例: 私

は，世間の人たちを信頼している)」「自律性 (項目例: 私は，自分で選んだり決めたりするのが好きである)」「自主性 (項目例: 私は，多くのことをこなせる精力的な人間である)」「勤勉性 (項目例: 私は，いっしょうけんめいに仕事や勉強をする)」「同一性[1] (項目例: 私は，自分が何になりたいのかをはっきりと考えている)」「親密性 (項目例: 私は，特定の人と深いつきあいができる)」「生殖性 (項目例: 私は，後輩や部下のめんどうをよく見る)」「統合性 (項目例: 私のこれまでの人生は，かけがえのないものだと思う)」の 8 下位尺度で構成される。“全くあてはまらない (1 点)”～“とてもよくあてはまる (5 点)”の 5 段階評定であり，得点が高いほどその心理社会的課題の達成感覚が強いことを示す。全 56 項目からなる。

## 3. 結果

### (1) 測定尺度の検討

EPSI の各下位尺度のまとまりを検討するために，下位尺度ごとに成分を 1 に指定した主成分分析を行った。その結果，共通性が 0.30 より低い 6 項目を分析から除外した。6 項目は「自律性」から“私は，この世の中でうまくやっていこうなどとは決して思わない”“私は，物事をありのままに受け入れることができる”の 2 項目，「統合性」から“私は，自分が死ぬことを考えると不安である”“私は，自分の死というものを受け入れることができる”の 2 項目，「親密性」から“私は，他の人よりも目立つのを好まない”の 1 項目，「生殖性」から“私は，自分を甘やかすところがある”の 1 項目であった。各下位尺度の $\alpha$ 係数は「信頼性」$\alpha$＝.75，「自律性」$\alpha$＝.81，「自主性」$\alpha$＝.69，「勤勉性」$\alpha$＝.74，「同一性」$\alpha$＝.71，「親密性」$\alpha$＝.73，「生殖性」$\alpha$＝.70，「統合性」$\alpha$＝.70 であった。「自主性」で若干低い値がみられたものの，その他はすべて $\alpha$＝.70 以上を示し

ており，データ解析においては許容できる範囲にあると考えられた。

### (2) 自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との相関

自己愛的脆弱性によるサブタイプ間の相違を検討する前に，特性としての自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚の関連を検討するため，NVS 短縮版と EPSI の相関係数を算出した (Table 5)。その結果，中程度の負の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「信頼性」,「承認・賞賛過敏性」と「信頼性」「自律性」「自主性」，NVS 短縮版総得点と「信頼性」であった ($r$s = -.41~43, いずれも $p$s < .01)。弱い負の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「自律性」「自主性」「同一性」「親密性」「統合性」,「潜在的特権意識」と「信頼性」「親密性」「統合性」,「承認・賞賛過敏性」と「勤勉性」「同一性」「親密性」「生殖性」「統合性」，NVS 短縮版総得点と「自律性」「自主性」「同一性」「親密性」「統合性」であった ($r$s = -.20~37, いずれも $p$s < .01)。「自己緩和不全」では，相関はほとんどみられなかった。

Table 5
自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との相関

| | NVS 短縮版 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 自己顕示抑制 | 自己緩和不全 | 潜在的特権意識 | 承認・賞賛過敏性 | 総得点 |
| EPSI | | | | | |
| 信頼性 | -.43** | -.05 | -.36** | -.42** | -.42** |
| 自律性 | -.28** | -.19** | -.14* | -.41** | -.35** |
| 自主性 | -.35** | -.13* | -.19** | -.41** | -.37** |
| 勤勉性 | -.17* | -.02 | -.02 | -.27** | -.16* |
| 同一性 | -.21** | -.13* | -.19** | -.35** | -.30** |
| 親密性 | -.27** | .14* | -.30** | -.27** | -.23** |
| 生殖性 | -.13* | .04 | -.04 | -.20** | -.11 |
| 統合性 | -.28** | -.08 | -.24** | -.37** | -.33** |

* $p$ < .05，** $p$ < .01

### (3) 自己愛的脆弱性サブタイプにおける心理社会的課題の達成感覚

自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数，EPSI の各下位尺度得点を従属変数として 1 要因分散分析を行った (Table 6)。その結果，自己愛的脆弱性サブタイプの主効果が「信頼性」($F$ (3, 230) = 21.20, $p$ < .01)，「自律性」($F$ (3, 230) = 12.79, $p$ < .01)，「自主性」($F$ (3, 230) = 10.88, $p$ < .01)，「同一性」($F$ (3, 230) = 7.87, $p$ < .01)，「親密性」($F$ (3, 230) = 9.42, $p$ < .01)，「統合性」($F$ (3, 230) = 9.65, $p$ < .01)で認められた。多重比較 (Tukey 法) の結果，「信頼性」「親密性」は，NV 低群と自己緩和困難群が，NV 高群と抑制優位群よりも有意に高かった。「自律性」「自主性」「同一性」は，NV 低群が，他の 3 群よりも有意に高かった。「統合性」は，NV 低群が NV 高群と抑制優位群よりも，自己緩和困難群は NV 高群よりも有意に高かった。

Table 6
自己愛的脆弱性サブタイプの心理社会的課題の達成感覚の比較

| | NV 低群 | 自己緩和困難群 | NV 高群 | 抑制優位群 | $F$ (3, 230) | 多重比較 (Tukey 法) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | | |
| 信頼性 | 3.51 (0.53) | 3.25 (0.48) | 2.69 (0.60) | 2.88 (0.62) | 21.20** | 高，抑制 < 低，困難 |
| 自律性 | 3.58 (0.66) | 2.91 (0.78) | 2.82 (0.90) | 2.78 (0.66) | 12.79** | 困難，高，抑制 < 低 |
| 自主性 | 3.27 (0.53) | 2.95 (0.57) | 2.68 (0.66) | 2.76 (0.45) | 10.88** | 困難，高，抑制 < 低 |
| 勤勉性 | 3.38 (0.50) | 3.18 (0.63) | 3.17 (0.63) | 3.08 (0.51) | 2.46 | |
| 同一性 | 3.68 (0.51) | 3.33 (0.65) | 3.12 (0.69) | 3.23 (0.50) | 7.87** | 困難，高，抑制 < 低 |
| 親密性 | 3.83 (0.51) | 3.77 (0.62) | 3.39 (0.71) | 3.38 (0.54) | 9.42** | 高，抑制 < 低，困難 |
| 生殖性 | 3.28 (0.53) | 3.14 (0.62) | 3.10 (0.65) | 2.97 (0.71) | 2.33 | |
| 統合性 | 3.72 (0.62) | 3.49 (0.64) | 3.02 (0.81) | 3.27 (0.56) | 9.65** | 高，抑制 < 低；高 < 低，困難 |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
注 2) 多重比較において，低＝NV 低群；困難＝自己緩和困難群；高＝NV 高群；抑制＝抑制優位群。
**$p$ < .01

## 4. 考察

研究 2-1 は，自己愛的脆弱性と Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) の心理社会的課題の達成感覚との関連を検討することを目的とした。相関分析の結果，中程度の負の相関がみられたのは，NVS 短縮版の 4 下位尺度

のうち「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」であり，8 つの心理社会的課題のうち，発達早期と関連深い「信頼性」「自律性」「自主性」においてのみ認められた。これより，自己愛的脆弱性のうち「自己顕示抑制」「承認・賞賛過敏性」の高さは，発達早期の心理社会的課題の達成感覚の低さと関連していることが示された。また，自己愛的脆弱性のうち「自己緩和不全」は，心理社会的課題の達成感覚とは関連がみられないことが示された。

自己愛的脆弱性サブタイプにおいて,「同一性」の達成感覚は，自己愛的脆弱性が低い NV 低群が，他の 3 群と比較して高かった。この結果は過敏型自己愛傾向がアイデンティティ形成と負の関連を示すという先行研究の結果 (上地・宮下, 2002; 清水他, 2008b) と一致する。また自己愛的脆弱性サブタイプは, 心理社会的発達段階のうち第 5 段階の「同一性」のみでサブタイプ間の差がみられるだけでなく,「信頼性」「自律性」「自主性」「親密性」「統合性」においても差がみられた。以下に，自己愛的脆弱性サブタイプの心理社会的課題の達成感覚の特徴をあげ，自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連を考察する。

NV 低群は,「信頼性」「自律性」「自主性」「同一性」「親密性」「統合性」の達成感覚が他群より高かった。この群の自己愛的脆弱性の全般的な低さが，多くの心理社会的課題の達成感覚の高さと関連していると示唆される。自分で自由に選択し，自発的に取り組むことができる感覚である「自律性」「自主性」(中西・佐方, 2001),「同一性」といった自己のあり方に関連する心理社会的課題の達成感覚の高さが，自分で心理的安定を保つ力の強さと関連していると考えられる。そのため他者からの配慮や評価に過敏になる必要がなく，他者とのかかわりに関連する「信頼性」「親密性」といった心理社会的課題の達成感覚が高い。これが自己表

現への抵抗の少なさと関連していると考えられる。

自己緩和困難群は,「自律性」「自主性」「同一性」の達成感覚は低く,「信頼性」「親密性」の達成感覚は NV 低群と同様に高かった。自己のあり方に関連する心理社会的課題の達成感覚の低さは，この群の他者に感情の緩和を求める傾向の強さと関連していると考えられる。しかし,「信頼性」「親密性」といった他者とのかかわりに関連する心理社会的課題には，高い達成感覚を得ている。これにより，他者への自己表現に対して抵抗が少なく，他者に感情を緩和してもらうことで，ある程度の心理的安定を保つことが可能であると推察される。

NV 高群は,「信頼性」「自律性」「自主性」「同一性」「親密性」「統合性」といった多くの心理社会的課題の達成感覚が低かった。この群は，自己のあり方に関連する心理社会的課題に脆弱さがある。自己のあり方への脆弱さが，傷つきを自分で抱えられない傾向の強さと関連していると考えられる。加えて，外界や自己への「信頼性」が低く，他者と親密な付き合いができる「親密性」が低い。これより，他者に感情の緩和を求めるが，他者は信頼できる対象ではない。そのため，他者からの評価や配慮に過敏になり，自己表現を抑制することが推察される。

抑制優位群は，NV 高群と同様,「信頼性」「自律性」「自主性」「同一性」「親密性」「統合性」といった多くの心理社会的課題の達成感覚が低かった。Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) によると，自律性は“自己表現の自由とその抑制などの割合にとって決定的な意味”を持ち，自主性は，自律性を保ちつつ主体的に行動できることである。そのため自己表現を抑制するというあり方は，自律性や自主性の乏しさと関連していると考えられる。加えて，上地・宮下 (2009) で「自己顕示抑制」が自尊感情を低下させ，それを介して対人恐怖傾向を強めることが示唆されて

いる。これより，自己表現を抑制するあり方は，他者への信頼感や親密性の感覚の乏しさとも関連していると考えらえる。また，この群は傷つきを自分で処理しようとする力があるが，これは自律性や自主性から生じているのではなく,他者への信頼の低さから生じている可能性がある。

以上より，青年の自己愛的脆弱性のサブタイプにより，心理社会的課題の各段階のうち「同一性」だけではなく，その他の段階にも差がみられた。なかでも発達早期との関連が高い「信頼性」「自律性」「自主性」においても差がみられた。加えて，自己愛的脆弱性の相関においても，「信頼性」「自律性」「自主性」において相関が認められた。これは，藤原 (1981) が“健康な自己愛こそ自我の自律的発達の基礎”と述べたように，個人の自己愛的脆弱性の特徴が原初的なレベルの心理社会的課題の達成感覚と関連していることを示唆する。

## 第 2 節　自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連 (研究 2-2)

### 1.　目的

自己愛的脆弱性と，Bowlby (1953, 1969 黒田他訳 1976) の愛着スタイルとの関連を検討する。まず，特性としての自己愛的脆弱性と愛着スタイルの関連を検討する。次に，自己愛的脆弱性サブタイプがどのような愛着スタイルを示すか，その特徴を見出すことで，両者の関連を検討する。

### 2.　方法

#### (1) 対象者

大学生・大学院生 209 名 (男性 70 名，女性 138 名，不明 1 名)，平均年齢 20.18 歳，標準偏差 1.28 歳であった。

#### (2) 調査手続き

講義時間終了後を利用した集団への実施と，個別の依頼により実施した。どちらも無記名式の質問紙を配布し，その場で回答を依頼した。その際，質問紙への回答は任意であること，本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明した。その上で，質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。

### (3) 尺度

**自己愛的脆弱性**　研究 1 と同様に，上地・宮下 (2009) の NVS 短縮版を用いた。“まったくない (1 点)” ～ “よくある (5 点)” の 5 段階評定であり，得点が高いほどその要素が強いことを示す。全 20 項目からなる。

**愛着スタイル**　戸田 (1988) の成人版愛着スタイル尺度を用いた。本尺度は，「安定 (項目例: 私はすぐに人と親しくなる方だ)」「アンビバレント (項目例: 時々，友達が本当は私を好いてくれていないのではないかとか，私と一緒にいたくないのではと心配になることがある)」「回避 (項目例: あまりにも親しくされたり，こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると，イライラしてしまう)」の 3 下位尺度で構成される。“全くあてはまらない (1 点)” ～ “非常によくあてはまる (6 点)” の 6 段階評定であり，得点が高いほどその要素が強いことを示す。全 18 項目からなる。

## 3. 結果

### (1) 測定尺度の検討

**NVS 短縮版**　探索的因子分析 (主因子解－Promax 回転) を行った結果，上地・宮下 (2009) と同じ 4 因子を抽出したため，同様の 4 下位尺度を用いた。各下位尺度の $\alpha$ 係数は「自己顕示抑制」$\alpha$＝.83,「自己緩和不全」$\alpha$＝.87,「潜在的特権意識」$\alpha$＝.85,「承認・賞賛過敏性」$\alpha$＝.82 であり，高い内的整合性が確認された。

**成人版愛着スタイル尺度**　探索的因子分析 (主因子解－Promax 回転) を行った結果，固有値の減衰状況から 5 因子を抽出した (Table 7)。累積説明率は 49.26%であった。各因子を構成する項目群の内容を検討すると，第 1 因子と第 4 因子は全て「安定」の項目群，第 2 因子は全て「アンビバレント」の項目群から構成された。第 3 因子と第 5 因子は，主に「回避」の項目群から構成された。山岸 (1994) では，戸田 (1988) の成人版愛着スタイル尺度に因子分析を行い，「回避」が，他者に頼ることを拒否する項目と，情緒的なつながりから距離をおこうとする項目に分かれている。その後，山岸 (2000) は戸田 (1988) の尺度の構造を明らかにするため，因子分析を行い，「アンビバレント」は「対人不安」と「自信のなさ」，「回避」は「自力志向」と「情緒的回避」の 2 因子に分かれることを示した。本研究では「アンビバレント」は 1 因子となったが，「回避」は山岸 (1994, 2000) と同様，他者に頼ることを拒否する項目からなる第 3 因子と，情緒的なつながりから距離をおこうとする項目からなる第 5 因子に分かれた。そのため本研究では，以降の分析を，山岸 (2000) に基づき，下位尺度のうち「回避」を「自力志向 (3 項目)」と「情緒的回避 (2 項目)」に分けて分析を行った。各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果，「安定」$\alpha$＝.82，「アンビバレント」$\alpha$＝.78，「自力志向」$\alpha$＝.53，「情緒的回避」$\alpha$＝.70 であった。「自力志向」で低い値がみられたが，その他はすべて $\alpha$＝.70 以上を示していた。加えて本研究では項目の内容を重視し，データ解析においては，上述の 5 下位尺度を用いることとした。

Table 7
成人版愛着スタイル尺度の因子分析結果 (主因子解－Promax 回転)

| 項目 | 因子負荷量 F1 | F2 | F3 | F4 | F5 |
|---|---|---|---|---|---|
| **第 1 因子** | | | | | |
| ・ 私はすぐに人と親しくなる方だ (安定) | **.95** | .07 | -.03 | -.02 | .00 |
| ・ 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある (安定) | **.78** | -.02 | .04 | .01 | .01 |
| ・ 私は知り合いができやすい方だ (安定) | **.73** | -.12 | -.05 | -.09 | .03 |
| **第 2 因子** | | | | | |
| ・ ちょっとしたことで，すぐに自信をなくしてしまう (アンビバレント) | -.07 | **.84** | -.17 | .16 | .06 |
| ・ あまり自分に自信がもてない方だ (アンビバレント) | -.14 | **.64** | -.21 | -.06 | .13 |
| ・ 自分を信用できないことがよくある (アンビバレント) | .01 | **.62** | .05 | .05 | .09 |
| ・ 時々友達が，本当は私を好いてくれていないのではないかとか，私と一緒にいたくないのではと心配になることがある (アンビバレント) | .12 | **.59** | .21 | -.07 | -.05 |
| ・ 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある (アンビバレント) | .01 | **.48** | .29 | -.18 | -.18 |
| ・ 私はいつも人と一緒にいたがるので，ときどき人から疎まれてしまう (アンビバレント) | .01 | **.39** | -.10 | -.04 | -.10 |
| **第 3 因子** | | | | | |
| ・ 人に頼るのは好きでない (回避) | -.05 | -.00 | **.77** | .19 | -.04 |
| ・ 私は人に頼らなくても，自分一人で充分にうまくやって行けると思う (回避) | .00 | -.23 | **.46** | .10 | .13 |
| ・ 人は全面的には信用できないと思う (回避) | .10 | .21 | **.46** | -.06 | .11 |
| ・ 気軽に頼ったり頼られたりすることができる (安定) | .29 | .02 | **-.36** | .10 | .09 |
| ・ あまり人と親しくなるのは好きでない (回避) | -.17 | -.08 | **.35** | -.20 | .21 |
| **第 4 因子** | | | | | |
| ・ たいていの人は私のことを好いてくれていると思う (安定) | -.12 | -.01 | .11 | **.96** | -.01 |
| ・ 私は人に好かれやすい性質だと思う (安定) | .29 | .03 | .11 | **.69** | -.00 |
| **第 5 因子** | | | | | |
| ・ あまりにも親しくされたり，こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると，イライラしてしまう (回避) | -.05 | .03 | .05 | .07 | **.72** |
| ・ どんなに親しい間柄であろうと，あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう (回避) | .11 | .00 | .07 | -.09 | **.68** |
| 因子間相関 第Ⅰ因子 | | -.22 | -.23 | .50 | -.02 |
| 第Ⅱ因子 | | | .44 | -.50 | .22 |
| 第Ⅲ因子 | | | | -.43 | .30 |
| 第Ⅳ因子 | | | | | -.08 |

注 1) 項目後の ( ) 内は，戸田 (1988) での下位尺度を示す。
注 2) 下線の項目は「自力志向」で用いた項目，波線の項目は「情緒的回避」で用いた項目を示す。

### (2) 自己愛的脆弱性による類型化

NVS 短縮版の 4 下位尺度得点を標準化し，Ward 法によるクラスタ分析を行った (Figure 5)。4 下位尺度得点全てが各下位尺度得点の平均より低いクラスタ (*n*=82)，自己緩和不全が高いクラスタ (*n*=45)，4 下位尺度得点全てが高いクラスタ (*n*=50)，自己顕示抑制が高いクラスタ (*n*=32) が抽出された。研究 1 と各クラスタの対象者数が異なるが，4 クラスタが研究 1 と同様の自己愛的脆弱性の性質をもつことから，研究 1 に基づき，順に NV 低群，自己緩和困難群，NV 高群，抑制優位群と命名を行った。

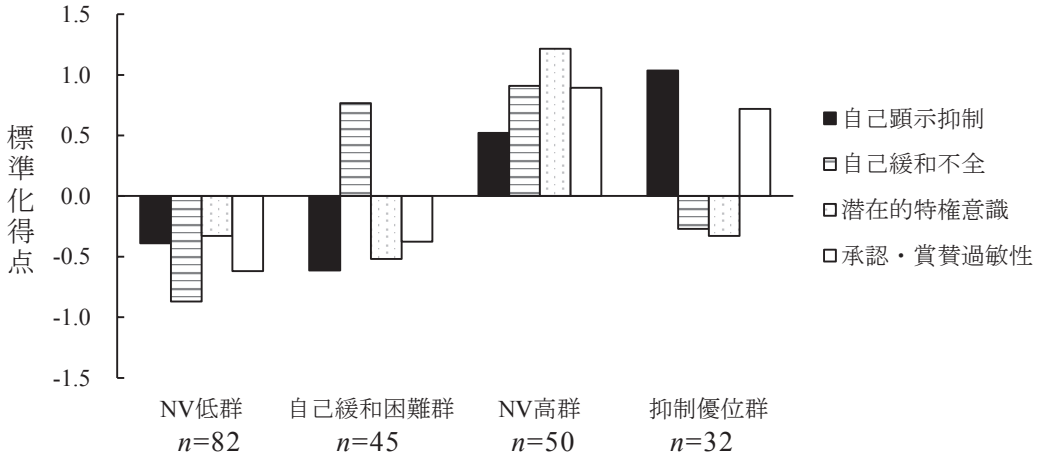


Figure 5. 研究 2-2 の対象者における自己愛的脆弱性のサブタイプ

また各クラスタの特徴を調べるために，クラスタを独立変数，NVS 短縮版の下位尺度を従属変数とする 1 要因分散分析を行った (Table 8)。その結果，主効果は 4 下位尺度全てにおいて有意となった (自己顕示抑制; $F$ (3, 205)＝40.36, 自己緩和不全; $F$ (3, 205)＝118.90, 潜在的特権意識; $F$ (3, 205)＝61.40, 承認・賞賛過敏性; $F$ (3, 205)＝56.51, いずれも, $ps < .01$)。多重比較 (Tukey 法) の結果,「自己顕示抑制」は，NV 高群と抑制優位群が，NV 低群と自己緩和困難群より有意に高かった。また抑制優位群

は，NV 高群より有意に高かった。「自己緩和不全」は，NV 高群と自己緩和困難群は，NV 低群と抑制優位群より有意に高かった。また抑制優位群は，NV 低群より有意に高かった。「潜在的特権意識」は，NV 高群が NV 低群，自己緩和困難群，抑制優位群より有意に高かった。「承認・賞賛過敏性」は，NV 高群と抑制優位群が，NV 低群と自己緩和困難群より有意に高かった。

Table 8
研究 2-2 での自己愛的脆弱性サブタイプの NVS 短縮版下位尺度得点の比較

| | NV 低群 | 自己緩和困難群 | NV 高群 | 抑制優位群 | $F$ (3, 205) | 多重比較 (Tukey 法) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | | |
| 自己顕示抑制 | 3.08 (0.67) | 2.90 (0.65) | 3.82 (0.73) | 4.24 (0.41) | 40.36** | 困難，低 < 高 < 抑制 |
| 自己緩和不全 | 1.83 (0.45) | 3.14 (0.40) | 3.25 (0.60) | 2.31 (0.50) | 118.90** | 低 < 抑制 < 困難，高 |
| 潜在的特権意識 | 2.29 (0.60) | 2.15 (0.37) | 3.45 (0.61) | 2.29 (0.51) | 61.40** | 低，困難，抑制 < 高 |
| 承認・賞賛過敏性 | 2.59 (0.63) | 2.79 (0.76) | 3.84 (0.56) | 3.70 (0.43) | 56.51** | 低，困難 < 高，抑制 |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
注 2) 多重比較において，低＝NV 低群; 困難＝自己緩和困難群; 高＝NV 高群; 抑制＝抑制優位群。
**$p$ < .01

自己愛的脆弱性サブタイプの特徴を，研究 1 の対象者内のみでなく，同一尺度を用いた先行研究との比較によって検討するため，大学生 460 名を対象にした先行研究 (上地・宮下, 2009) の NVS 短縮版下位尺度得点と，自己愛的脆弱性サブタイプの下位尺度得点を比較した ($t$ 検定, Welch の検定; Table 9)。その結果，NV 低群は先行研究と比較して，4 下位尺度のうち 3 下位尺度が有意に低かった (自己緩和不全; $t$ (209.44) = 16.66, 潜在的特権意識; $t$ (540) = 4.17, 承認・賞賛過敏性; $t$ (131.05) = 9.49, いずれも $p$s < .01)。自己緩和困難群は先行研究と比較して,「自己緩和不全」が有意に高く,「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」は有意に低かった (自己緩和不全; $t$ (94.65) = 3.03, 潜在的特権意識; $t$ (75.31) = 7.35, 承認・賞賛過敏性; $t$ (503) = 4.45, いずれも $p$s < .01)。NV 高群は先行研

究と比較して，4 下位尺度得点全てが有意に高かった (自己顕示抑制; $t$ (508) = 6.52, 自己緩和不全; $t$ (73.96) = 3.46, 潜在的特権意識; $t$ (508) = 8.37, 承認・賞賛過敏性; $t$ (71.86) = 5.67, いずれも $p$s < .01)。抑制優位群は先行研究と比較して，「自己顕示抑制」「承認・賞賛過敏性」が有意に高く，「自己緩和不全」「潜在的特権意識」は有意に低かった(自己顕示抑制; $t$ (55.20) = 15.29, 自己緩和不全; $t$ (45.35) = 6.15, 潜在的特権意識; $t$ (490) = 2.73, 承認・賞賛過敏性; $t$ (46.78) = 4.21, いずれも $p$s < .01)。

Table 9
研究 2-2 での自己愛的脆弱性サブタイプと
先行研究 (上地・宮下, 2009) の対象者との比較

| | 上地・宮下 (2009) | NV 低群 | 自己緩和困難群 | NV 高群 | 抑制優位群 |
|---|---|---|---|---|---|
| 自己顕示抑制 | 2.95 (0.91) | 3.08 (0.67) | 2.90 (0.65) | 3.82 (0.73)** | 4.24 (0.41)** |
| 自己緩和不全 | 2.92 (0.89) | 1.83 (0.45)** | 3.14 (0.40)** | 3.25 (0.60)** | 2.31 (0.50)** |
| 潜在的特権意識 | 2.62 (0.67) | 2.29 (0.60)** | 2.15 (0.37)** | 3.45 (0.61)** | 2.29 (0.51)** |
| 承認･賞賛過敏性 | 3.34 (0.79) | 2.59 (0.63)** | 2.79 (0.76)** | 3.84 (0.56)** | 3.70 (0.43)** |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
** $p$ < .01

### (3) 自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの相関

自己愛的脆弱性によるサブタイプ間の相違を検討する前に，特性としての自己愛的脆弱性と愛着スタイルの関連を検討するため，NVS 短縮版と成人版愛着スタイル尺度の相関係数を算出した (Table 10)。その結果，中程度の正の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「アンビバレント」，「承認・賞賛過敏性」と「アンビバレント」，NVS 短縮版「総得点」と「アンビバレント」であった ($r$s = .54~57, いずれも $p$s < .01)。弱い正の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「自力志向」「情緒的回避」，「自己緩和不全」と「安定」，「潜在的特権意識」と「アンビバレント」「情緒

的

回避」であった (*r*s = .20~27, いずれも *p*s < .01)。弱い負の相関が認められたのは「自己顕示抑制」と「安定」,「自己緩和不全」と「自力志向」であった (順に, *r*s = -.20, -22, いずれも *p*s < .01)。

Table 10
自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの相関

| | NVS 短縮版 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 自己顕示抑制 | 自己緩和不全 | 潜在的特権意識 | 承認・賞賛過敏性 | 総得点 |
| **愛着スタイル** | | | | | |
| 安定 | -.20** | .25** | .14* | -.03 | .05 |
| アンビバレント | .57** | .17* | .25** | .54** | .55** |
| 自力志向 | .27** | -.22** | -.18* | .18** | .15* |
| 情緒的回避 | .20** | .04 | .21** | .07 | .18** |

* $p < .05$, ** $p < .01$

### (4) 自己愛的脆弱性サブタイプにおける愛着スタイル

自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数，成人版愛着スタイルの各下位尺度得点を従属変数として 1 要因分散分析を行った (Table 11)。その結果，自己愛的脆弱性サブタイプの主効果が「安定」($F$ (3, 205) = 7.40, $p$ < .01),「アンビバレント」($F$ (3, 205) = 23.06, $p$ < .01),「自力志向」($F$ (3, 205) = 7.31, $p$ < .01) で認められた。多重比較においては，等分散性の検定 (Levene 統計量) の結果,「安定」「アンビバレント」は等分散が仮定されたため (順に, $F$s (3, 205) = 2.43, 1.60, いずれも, $p$s > .05)，Tukey 法を用いた。「自力志向」は，等分散性が仮定されなかったため ($F$ (3, 205) = 6.38, $p$ < .001)，Games-Howell 法を用いた。多重比較の結果,「安定」は，自己緩和困難群と NV 高群が，抑制優位群よりも有意に高かった。また, 自己緩和困難群は NV 低群より有意に高かった。「アンビバレント」は，NV 高群と抑制優位群が，NV 低群と自己緩和困難群より有意に高か

った。「自力志向」は，自己緩和困難群が他の 3 群よりも有意に低かった。

Table 11
自己愛的脆弱性サブタイプの愛着スタイルの比較

| | NV 低群 | 自己緩和困難群 | NV 高群 | 抑制優位群 | $F$ (3, 205) | 多重比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | | |
| 安定 | 3.41 (0.84) | 3.93 (0.58) | 3.69 (0.88) | 3.16 (0.78) | 7.40** | 抑制 < 高，困難；低 < 困難 [a] |
| アンビバレント | 3.05 (0.69) | 3.02 (0.75) | 3.91 (0.85) | 3.92 (0.65) | 23.06** | 低，困難 < 高，抑制 [a] |
| 自力志向 | 3.20 (0.87) | 2.55 (0.77) | 3.21 (1.09) | 3.34 (0.61) | 7.31** | 困難 < 低，高，抑制 [b] |
| 情緒的回避 | 2.88 (1.23) | 2.76 (0.95) | 3.17 (1.31) | 2.75 (0.94) | 1.34 | |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
注 2) 多重比較において，低＝NV 低群；困難＝自己緩和困難群；高＝NV 高群；抑制＝抑制優位群。
**$p$ < .01
[a] Tukey 法，[b] Games-Howell 法

## 4. 考察

研究 2-2 は，自己愛的脆弱性と Bowlby (1953, 1969 黒田他訳 1976) の愛着スタイルとの関連を検討することを目的とした。相関分析の結果，中程度の正の相関がみられたのは「自己顕示抑制」「承認・賞賛過敏性」「総得点」と「アンビバレント」であった。「安定」「自力志向」「情緒的回避」では，中程度以上の相関は認められなかった。以上から，成人版愛着スタイルの下位尺度のうち，自己愛的脆弱性と関連するのは「アンビバレント」であり，アンビバレントが高いほど，自己愛的脆弱性が高いことが示された。

以下に，自己愛的脆弱性サブタイプの愛着スタイルの特徴をあげ，自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連を考察する。NV 低群は，「安定」は自己緩和困難群より，「アンビバレント」は抑制優位群と NV 高群より有意に低く，「自力志向」は自己緩和困難群より有意に高かった。「アンビバレント」が低いという結果から，NV 低群の青年は，対人関係への不安感 (Hazan & Shaver, 1987) が低い。自己愛的脆弱性が低い NV 低群は，安定型の愛着スタイルを示すと考えられるが，「安定」は低かった。成人版愛着スタイル尺度 (戸田, 1988) の「安定」は，愛着スタイルの安

定型の特徴を測定していると想定される。しかし項目内容から，社交性や対人関係に入っていく際の円滑さに関する面を測定している可能性が指摘されている (中尾・加藤, 2003)。「アンビバレント」の低さと併せて考えると，NV 低群の「安定」の低さは不安定型の愛着スタイルを反映しているとは断定できず，さらなる検討が必要であると考えられる。以上から NV 低群の青年は，例えば大学入学直後などの新規場面においてはすぐに適応することは難しい可能性がある。しかし基本的には対人的不安感が低く，いったん対人関係が形成されると，安定した関係を持続することが可能と考えられる。

自己緩和困難群は,「安定」は NV 低群と抑制優位群より有意に高く,「アンビバレント」は抑制優位群と NV 高群より有意に低く,「自力志向」は他の 3 群よりも有意に低かった。「アンビバレント」の低さ,「安定」の高さから，自己緩和困難群は安定型の愛着スタイルをもつと考えられる。安定型の愛着スタイルは，親密さや依存を快く思っており，対人関係上の不安がない (Hazan & Shaver, 1987)。また上述した通り，社交性や対人関係に入っていく際の円滑さも高い。そのため新規状況においてもすぐに対人関係を形成し，適応することが可能であると考えられる。またこの群は,「自力志向」が他の 3 群よりも低かった。自己緩和困難群の傷つきを独りで抱えることができないという自己愛的脆弱性の特徴と併せると，自立への志向性が低く，依存的な対人関係を形成しやすい可能性がある。

NV 高群は,「安定」は抑制優位群より有意に高く,「アンビバレント」は NV 低群と自己緩和困難群より有意に高く,「自力志向」は自己緩和困難群より有意に低かった。「アンビバレント」の高さから，NV 高群の青年は，対人関係への不安感が高く，不安定型の愛着スタイルをもつと考

えられる。しかしこの群は「安定」が高く，社交性や対人関係における円滑さをもつ。これより NV 高群は対人関係の場面において，他者とある程度，円滑なコミュニケーションをとることが可能であると考えられる。しかし心理的には，関わりのある他者に対して，自分は好かれていないのではないかという不安を抱えており，他者と親密な関係を維持させることが困難であると考えられる。この群の青年の社交性の高さから，一見した所，周囲からは心理的な不安を抱えていることは気づかれにくい可能性がある。そのため周囲は, NV 高群の表面的な言動のみならず，心理状態にも配慮する必要がある。

抑制優位群は,「安定」は自己緩和困難群と NV 高群より有意に低く,「アンビバレント」は NV 低群と自己緩和困難群より有意に高く,「自力志向」は自己緩和困難群より有意に高かった。「アンビバレント」の高さと「安定」の低さから，抑制優位群は不安定型の愛着スタイルをもつと考えらえる。不安定型の愛着スタイルは感情表出の統制と関連していることが示されている (Feeney, 1999)。これは，この群の自己顕示を恥ずかしいものと思い，自己表現を抑制する特徴と関連していると考えられる。抑制優位群の青年は，対人関係に不安を持ち，その不安から他者との関わりを回避することを求め,感情表出を抑制しやすいと考えられる。

以上から，自己愛的脆弱性サブタイプにより，愛着スタイルの特徴に差がみられた。自己愛的脆弱性に問題がない NV 低群は不安定な愛着スタイルを示さず，自己愛的脆弱性が高い NV 高群は不安定な愛着スタイルを示した。これより自己愛的脆弱性の背景には，幼児期の主要な愛着対象との間で形成された不安定な愛着スタイルが反映していることが示された。また自己緩和困難群が安定した愛着スタイルを示したことに対し，抑制優位群は不安定な愛着スタイルを示した。両群の自己愛的脆弱

性の特徴の違いから,「自己顕示抑制」「自己緩和不全」という特徴が,愛着スタイルの違いを反映していると示唆された。

# 第 4 章　自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連 (研究 3)

## 第 1 節　自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連 (研究 3-1)

### 1.　目的

自己愛的脆弱性と，現在の自己対象体験との関連を検討する。まず，特性としての自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験の関連を検討する。次に自己愛的脆弱性サブタイプにより，現在の自己対象体験の特徴を見出すことで，両者の関連を検討する。

### 2.　方法

#### (1) 対象者・類型化の手続き

研究 2-2 と同じ大学生・大学院生 209 名 (男性 70 名，女性 138 名，不明 1 名)，平均年齢 20.18 歳，標準偏差 1.28 歳であった。自己愛的脆弱性のサブタイプも，研究 2-2 と同様である。

#### (2) 調査手続き

研究 2-2 の質問紙調査の際に，併せて調査を行った。講義時間終了後を利用した集団への実施と，個別の依頼により実施した。どちらも無記名式の質問紙を配布し，その場で回答を依頼した。その際，質問紙への回答は任意であること，本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明した。その上で，質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。

#### (3) 尺度

**現在の自己対象体験**　小林 (2006) の自己対象体験尺度を用いた。本尺度は,「鏡映自己対象体験 (項目例: 自分がする話にはいつもたいてい興味を持って耳を傾けてくれる)」「双子自己対象体験 (項目例: まるで双子の片割れのように，自分と同じようだと感じることがある)」「理想化

自己対象体験 (項目例: 自分よりも色々なことを知っている)」の 3 下位尺度で構成される。対象者が自己対象体験の想定を十分理解して回答できるように，小林 (2006) と同様，質問項目ごとに想定する人物が異なっても良いこと，実際に会ったことがない人物でも良いこと，人物だけでなく，動物・言葉等どんなものでも良いことを教示した。評定は，“そう思わない (1 点)”～“そう思う (5 点)”の 5 段階評定であり，得点が高いほどその要素が強いことを示す。全 15 項目からなる。

## 3. 結果

### (1) 測定尺度の検討

自己対象体験尺度の全 15 項目において，天井効果・床効果の確認を行ったところ，「理想化自己対象体験」の全ての項目 (3 項目) で，天井効果が認められた。これらの項目は，小林 (2006) の先行研究においても天井効果がみられている。親からの分離と親に代わる新たな対象の獲得が課題となる青年期 (乾, 2009) においては，理想化された対象とみなしていた親に対し，脱理想化が生じる。それにより，親の代わりとなる仲間集団や青年期に特有の文化やアイドル，歴史上の英雄や芸術などを理想化自己対象体験の対象とする (Wolf, 1988 安村他訳 2001)。本研究は青年を対象としていることから，親への脱理想化に伴い，親の代わりとなる理想化の対象を希求する傾向が強く，理想化自己対象体験が多くあると考えられる。それにより，「理想化自己対象体験」の平均値が高まったと推測される。天井効果が認められたことにより，研究 3-1 の対象者の特性を十分測定することができていないという問題がある。しかし，概念的に必要な項目であることから，データ解析においては，「理想化自己対象体験」の 3 項目を用いることとした。各下位尺度の $\alpha$ 係数は「鏡映自己対象体験」$\alpha$＝.79，「双子自己対象体験」$\alpha$＝.78，「理想化自己対

象体験」$\alpha$＝.81 であり，十分な内的整合性が確認された。

### (2) 自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との相関

自己愛的脆弱性によるサブタイプ間の相違を検討する前に，特性としての自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連を検討するため，NVS 短縮版と自己対象体験尺度の相関係数を算出した (Table 12)。その結果，中程度以上の相関はいずれも認められなかった。弱い正の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「理想化自己対象体験」,「自己緩和不全」と「鏡映自己対象体験」「双子自己対象体験」,「承認・賞賛過敏性」と「理想化自己対象体験」,「総得点」と「理想化自己対象体験」 ($r$s = .23~28, いずれも $p$s < .01) であった。弱い負の相関が認められたのは「自己顕示抑制」と「鏡映自己対象体験」であった ($r$ = -.20, $p$ < .01)。

Table 12
自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験の相関

| | NVS 短縮版 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 自己顕示抑制 | 自己緩和不全 | 潜在的特権意識 | 承認･賞賛過敏性 | 総得点 |
| **自己対象体験尺度** | | | | | |
| 鏡映自己対象体験 | -.20** | .24** | .08 | .02 | .05 |
| 双子自己対象体験 | -.14* | .28** | .10 | .12 | .13 |
| 理想化自己対象体験 | .25** | .15* | -.02 | .25** | .23** |

* $p$ < .05, ** $p$ < .01

### (3) 自己愛的脆弱性サブタイプにおける現在の自己対象体験

自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数，自己対象体験の各下位尺度得点を従属変数として 1 要因分散分析を行った (Table 13)。その結果，自己愛的脆弱性サブタイプの主効果が「鏡映自己対象体験」($F$ (3, 205) = 4.05, $p$ < .01),「双子自己対象体験」($F$ (3, 205) = 6.58, $p$ < .01) で認められた。「理想化自己対象体験」においては，有意傾向が認められた ($F$ (3, 205) = 2.41, $p$ < .10)。多重比較（Tukey 法）の結果,「鏡映自己対象体験」

は，自己緩和困難群が NV 低群と抑制優位群よりも有意に高かった。「双子自己対象体験」は，自己緩和困難群が NV 低群と抑制優位群より有意に高かった。また，NV 高群は NV 低群より有意に高かった。「理想化自己対象体験」は，抑制優位群が NV 低群より高い傾向があった。

Table 13
自己愛的脆弱性サブタイプの現在の自己対象体験の比較

| | NV 低群 *M* (*SD*) | 自己緩和困難群 *M* (*SD*) | NV 高群 *M* (*SD*) | 抑制優位群 *M* (*SD*) | *F* (3, 205) | 多重比較 (Tukey 法) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 鏡映自己対象体験 | 3.77 (0.65) | 4.14 (0.69) | 3.95 (0.69) | 3.70 (0.64) | 4.05** | 低，抑制 ＜ 困難 |
| 双子自己対象体験 | 3.62 (0.54) | 4.00 (0.55) | 3.92 (0.56) | 3.66 (0.51) | 6.58** | 低，抑制＜困難；低＜高 |
| 理想化自己対象体験 | 4.43 (0.68) | 4.51 (0.61) | 4.62 (0.58) | 4.74 (0.46) | 2.41† | 低＜抑制 |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。
注 2) 多重比較において，低＝NV 低群；困難＝自己緩和困難群；高＝NV 高群；抑制＝抑制優位群。
$^{**}p < .01$, $^{\dagger}p < .10$

## 4. 考察

研究 3-1 は，自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連を検討することを目的とした。相関分析の結果，中程度以上の相関は認められなかった。自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験は，特性としては，関連が弱いことが示された。

以下に，自己愛的脆弱性サブタイプの現在の自己対象体験の特徴をあげ，自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連を考察する。NV 低群は,「鏡映自己対象体験」が自己緩和困難群より,「双子自己対象体験」が自己緩和困難群と NV 高群より有意に低かった。「理想化自己対象体験」は抑制優位群より低い傾向があった。これより NV 低群の青年は，調査時点の段階で他群と比較して，3 つの自己対象体験が少ない状況にあると考えられる。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) によると，個人は生涯，自己を支えるために，

自己対象体験を必要としている。しかし変容性内在化を経て，自己が発達していくに従い，直接的な自己対象体験を必要とせずとも，自律的に自己を安定化させることが可能となる。NV 低群は，自己愛的脆弱性が低く，自律的に心理的安定を維持する力を持っている。そのため多くの自己対象体験を必要としなくても，心理的安定を維持することが可能であり，自己対象体験が他群より少なかったと考えられる。

自己緩和困難群は,「鏡映自己対象体験」と「双子自己対象体験」が NV 低群と抑制優位群より有意に高かった。自己緩和困難群は調査時点の段階で，他群と比較して，上記の 2 つの自己対象体験が多くある。「鏡映自己対象体験」は自らの感情を理解・共感してもらう体験,「双子自己対象体験」は類似性や共通性を感じる体験 (小林, 2006) である。この 2 つの自己対象体験の多さは，この群の青年の傷つきを独りで抱えることができないという自己愛的脆弱性の特徴と関連すると考えられる。自らの力で心理的安定を保つことが脆弱であるため，他者に感情の調整を求める。そのため，他者から共感してもらう体験や，他者と共通性を感じる体験が多く必要になるであろう。

NV 高群は,「双子自己対象体験」が NV 低群より有意に高かった。自己緩和困難群と同様，この群の傷つきを独りで抱えることができないという自己愛的脆弱性の特徴が，対象との類似性や共通性を感じる体験である「双子自己対象体験」の多さと関連していると考えられる。しかし「鏡映自己対象体験」において，自己緩和困難群が NV 低群や抑制優位群よりも有意に高かったことに対し，NV 高群は NV 低群や抑制優位群よりも下位度得点の平均値は高いものの，有意差は認められなかった。これは，この群の青年が持つ傷つきを独りで抱えられないという特徴に加えて，他者からの承認や賞賛への過敏性，自己顕示を抑制する傾向，

潜在的な特権意識を抱えているという自己愛的脆弱性の全般的な高さが関連していると考えられる。吉井 (2007) によると，表面上の低い自己評価，潜在的な理想への強いこだわりと誇大性，対人関係の過敏さをもつ過敏型自己愛傾向者は，強い対象希求を持ちつつも，過敏で傷つきやすいがゆえに，人への接近回避葛藤をもつ。このような過敏型自己愛傾向者との心理面接では，過敏型自己愛傾向者は，自己愛が傷つかないように面接者と一定の心理的距離をとることを求める。その際，心理的距離を保ちながら過敏型自己愛傾向者の不安や抵抗を和らげるためには，双子自己対象体験が重要となる。つまり，潜在的には理想への強いこだわりを持つ過敏型自己愛傾向者にとって，面接者も自分と同様，不完全な人間と分かることは，親しみや安心感をもたらす。NV 高群は，自己愛的脆弱性の特徴が顕著であり，吉井 (2007) の言う過敏型自己愛傾向者と同質と考えられる。そのため NV 高群は，心理的安定を保つために，「双子自己対象体験」が多くあると考えられる。

抑制優位群は,「鏡映自己対象体験」と「双子自己対象体験」は自己緩和困難群より有意に低く,「理想化自己対象体験」は NV 低群より高い傾向があった。抑制優位群の青年は調査時点の段階で，自らの感情を共感してもらう体験や，共通性を感じる体験はあまりない。これは，この群の自己顕示抑制の高さと関連すると考えられる。他者に，自己顕示欲求をはじめとした，自己の感情を表現することへの抵抗が強いため，これら 2 つの自己対象体験が少なくなっていると考えられる。対象との共感的な自己対象体験や，共通性を感じる自己対象体験が少ない状況において，抑制優位群の自己を支えるのは理想化自己対象体験である。対象を理想化し,融合することにより,心理的安定を図っていると考えられる。しかし「鏡映自己対象体験」「双子自己対象体験」が少なく,「理想化自

己対象体験」を重視するあり方は，自己の感情や欲求，考えを軽視することにつながる可能性もある。例えば，他者から認められたいという欲求があった場合，それを他者に表現し，他者から共感されたり，他者も同様の感情や考えを持っていると分かることで，自身の欲求が認められる体験となる。このように自己を承認されることで，自身の感情，考え，欲求などを重視し，他者に対しても自己表現を行っていくことにつながる。このような自己を承認される体験が乏しいなかで「理想化自己対象体験」が多くなれば，理想化された対象と自己を比較し，劣等感を強め，自己の感情や欲求などを軽視し，さらに自己表現への抵抗も強まる可能性がある。

以上から，自己愛的脆弱性サブタイプにより，現在の自己対象体験のあり方に差がみられた。自己愛的脆弱性に問題がない NV 低群は，調査時点で全ての自己対象体験が他群より低かった。一方，何らかの自己愛的脆弱性の特徴をもつ他の 3 群は，それぞれ自己対象体験の種類は異なるものの，多くの自己対象体験があった。この結果は，自己愛的脆弱性を抱えた青年は，自律的に心理的安定を維持することが困難であり，そのために自己対象体験を多く必要とすることを示している。加えて，自己愛的脆弱性の形成の背景に，変容性内在化が不十分であることが推察される。

## 第 2 節　自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連 (研究 3-2)

### 1.　目的

自己愛的脆弱性と，青年の回想的な語りによる，幼児期から青年期までの親との自己対象体験との関連を検討する。具体的には，以下の 2 点を検討する。①青年の自己愛的脆弱性の状態により，青年が語る，これ

までの親との自己対象体験に相違や特徴がみられるかどうか。②また，相違や特徴がみられるとしたら，どのような自己対象体験が関連しているのか。

## 2. 方法

### (1) 対象者

研究 1 の対象者のうち，面接調査の協力に応じた 20 名 (男性 8 名，女性 12 名)，平均年齢 19.65 歳，標準偏差 0.79 歳であった。面接調査協力の依頼は，研究 1 の集団質問紙調査の際に行った。質問紙の最終ページに面接調査の概要を記載し，調査に協力してもよいと考えた大学生に，連絡先を記入してもらった。対象者の選出にあたって，連絡先を記入した大学生 47 名 (NV 低群 6 名，自己緩和困難群 14 名，NV 高群 12 名，抑制優位群 15 名) から，4 群の対象者数が等しくなるように試みた。しかし，NV 低群は連絡がとれた全員を対象者としたが 3 名となった。同様に NV 高群も連絡がとれた全員を対象者とし 5 名となった。自己緩和困難群と抑制優位群は，連絡がとれた大学生のうち半構造化面接のスケジュールと都合の合う 6 名を対象者として選出した。対象者のプロフィールを Table 14 に示した。

Table 14
対象者のプロフィール

| 対象者 | 性別 | 年齢 | NVS 短縮版 自己顕示抑制 | 自己緩和不全 | 潜在的特権意識 | 承認・賞賛過敏性 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 【NV 低群】 | | | | | | |
| A | 男性 | 19 | 3.6 | 2.2 | 1.8 | 2.0 |
| B | 男性 | 20 | 3.0 | 2.8 | 2.6 | 2.0 |
| C | 女性 | 20 | 2.0 | 2.8 | 2.0 | 2.6 |
| 【自己緩和困難群】 | | | | | | |
| D | 女性 | 19 | 3.2 | 4.8 | 2.0 | 3.6 |
| E | 女性 | 19 | 3.8 | 3.6 | 2.4 | 3.4 |
| F | 女性 | 19 | 3.8 | 4.0 | 1.8 | 3.0 |
| G | 女性 | 19 | 3.4 | 3.4 | 1.8 | 4.6 |
| H | 女性 | 19 | 2.8 | 3.0 | 2.4 | 3.0 |
| I | 女性 | 20 | 3.0 | 3.4 | 3.0 | 4.0 |
| 【NV 高群】 | | | | | | |
| J | 男性 | 21 | 5.0 | 5.0 | 5.0 | 5.0 |
| K | 男性 | 21 | 4.4 | 3.4 | 4.4 | 5.0 |
| L | 男性 | 20 | 3.6 | 4.4 | 3.6 | 3.2 |
| M | 女性 | 19 | 3.4 | 3.0 | 3.4 | 4.0 |
| N | 女性 | 19 | 5.0 | 5.0 | 3.6 | 4.4 |
| 【抑制優位群】 | | | | | | |
| O | 男性 | 21 | 3.2 | 2.6 | 3.6 | 3.0 |
| P | 男性 | 20 | 5.0 | 2.0 | 1.8 | 2.6 |
| Q | 男性 | 19 | 3.6 | 2.6 | 2.8 | 4.6 |
| R | 女性 | 19 | 4.6 | 3.4 | 1.8 | 4.2 |
| S | 女性 | 19 | 3.8 | 2.8 | 1.8 | 3.4 |
| T | 女性 | 19 | 4.4 | 2.6 | 2.8 | 2.4 |

注 1) NVS 短縮版の数値は，各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を示す。

### (2) 調査手続き

1 回 90 分～120 分の半構造化面接を行った。「親との間で，印象に残っている思い出を小さい時のものから教えてください」と教示を行い，対象者に自由に語ってもらった。調査者は適宜，対象者が語るエピソードが何歳ぐらいの時のものか，その当時，対象者が親に対してどう思ったか尋ねた。なお対象者には，面接開始前に面接承諾書に署名を求め，録音や結果の公表についての同意を得た。その上で面接内容をすべて録音した。また，本研究は広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会によ

って承認された。

### (3) 分析方法

分析は佐藤 (2008) の定性的コーディングの演繹的アプローチを参考に行った。演繹的アプローチは，既存の理論的枠組みや，それまでの調査結果などをもとに，最初に大まかなデータ分析のためのアウトラインを作成する方法である (佐藤, 2008)。本研究では Kohut の理論を元に，以下のアウトラインを想定した: 一般的な自己の発達をしている青年の場合，幼児期・児童期までは，十分な親との原始的な自己対象体験 (鏡映自己対象体験･理想化自己対象体験･双子自己対象体験) が存在する。しかし適量の欲求不満を体験することで，親の自己対象体験としての機能が内在化されていく。思春期に入ると，親へ反抗するなどの対立自己対象体験を経て，親への自己対象欲求は減少し，しだいに成熟した自己対象体験となる。

具体的な分析は，以下の手順で行った。①録音記録をもとに逐語記録を作成した。②逐語記録から親との関わりや，親への感情について言及している部分の語りを意味のある単位として抽出した (文書セグメント化)。③文書セグメントを幼児期・児童期と思春期以降の 2 つの時期に分類した。④文書セグメントごとにオープン・コードを付与した。一つの文書セグメントに二つ以上付与することもあった。⑤オープン・コードの特徴を整理し，類似したものをまとめ，焦点的コード，下位コード，上位コードの順に精緻化を行った。その際，必要に応じて対象者の文書セグメントや別の文書セグメント，逐語記録，他の対象者と照合しながら行った。また，ゼミなどで面接データの質的分析を専門とする複数の研究者から定期的にチェックを受け，適宜，修正を行った。⑥コードの信頼性を検討するため，臨床心理学を専攻する大学院生 1 名が評定を行

ったところ，幼児期・児童期の上位コードの一致率が 97.79%，下位コードの一致率が 91.18%，焦点的コードの一致率が 88.24%，思春期以降の上位コードの一致率が 94.12%，下位コードの一致率が 93.14%，焦点的コードの一致率が 88.24%，であった。分類が一致しない場合は，協議の上，修正を行った。

## 3. 結果と考察

### (1) 親との自己対象体験

分析の結果，幼児期・児童期は 33 の焦点的コードから 8 の下位コードを作成した。思春期以降は 27 の焦点的コードから 8 の下位コードを作成した。各時期の下位コードから，その時期の自己の発達を促進するような自己対象体験かどうかという基準により，2 の上位コードを作成した (Table 15)。以下に，時期ごとに上位コード，下位コードの特徴を記述する (文中では上位コードを『 』，下位コードを〈 〉で示した)。

Table 15
親との自己対象体験

| 時期 | 上位コード | 下位コード<br>概要<br>(人数) | 焦点的コードの例:<br>語りの例 (対象者) | 各サブタイプの焦点的コードの出現状況<br>NV 低群<br>($n$=3) | 自己緩和困難群<br>($n$=6) | NV 高群<br>($n$=5) | 抑制優位群<br>($n$=6) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 幼児期・児童期 | 発達促進的な自己対象体験 | **鏡映自己対象体験**<br>親に自分自身を表現し，受け入れられた体験。<br>($n$=11) | 褒められる: 毎日，お手伝いをやってるのと，母親から褒められるので，すごい自信があります。自己効力感がそうとう高められてた。(L) | 会話<br>(A,B,C),<br>褒められる<br>(A),<br>身近な存在<br>(B),<br>甘える<br>(A) | 会話<br>(F,H),<br>甘える<br>(F),<br>身近な存在<br>(G) | 会話<br>(K),<br>褒められる<br>(L),<br>欲求を満たしてくれる<br>(M) | 会話<br>(O,P),<br>好き放題やる<br>(O) |
| | | **理想化自己対象体験**<br>親を理想化の対象として捉えて一体化したり，親から保護される体験。<br>($n$=13) | 一体化: 母が明るいしおもしろい人なので，大好きというか。母の言うことは何も疑わなかったし，言った通りにして間違ったことがなかった。(N) | ケア<br>(A,B),<br>理想化<br>(B) | 一体化<br>(D,E,F,G,H),<br>理想化<br>(D,G),<br>ケア<br>(G) | 一体化<br>(J,M,N),<br>理想化<br>(K,N),<br>ケア<br>(K) | ケア<br>(O,S),<br>一体化<br>(O) |
| | | **対立自己対象体験**<br>親との関係を損なう恐れがなく，反抗したり，親と異なる考えを主張する体験。<br>($n$=10) | 自己主張: 弟が生まれて「お姉ちゃん」って呼ばたから，「お姉ちゃんって呼ぶの止めて」って言いました。それから名前で呼ばれてます。(D) | 反発<br>(B),<br>自己主張<br>(C) | 自己主張<br>(D,F,G,H) | 自己主張<br>(M) | 反発<br>(P,R),<br>自己主張<br>(O) |
| | | **行動の共有**<br>親と出かけたり遊ぶなど，一緒に行動をする体験。<br>($n$=13) | 一緒に行動する: 家族でよく出かけることはありました。公園行こうとかピクニック行こうとか。けっこう楽しい感じです。(I) | 一緒に<br>行動する<br>(B,C) | 一緒に<br>行動する<br>(D,F,G,H,I) | 一緒に<br>行動する<br>(J,K,M) | 一緒に<br>行動する<br>(O,Q,S) |
| | | **適量の欲求不満**<br>外傷的でない程度の，親の応答や共感の失敗など，親へ失望する体験。<br>($n$=12) | 叱られる: 親から厳しくはされて嫌だったんですけど，悪いことをしてるんで，仕方ないのかなって思って，受け入れてはいたんですけど。(O) | 叱られる<br>(A,B),<br>分離の寂しさ<br>(B,C),<br>自発的な行動<br>(C) | 叱られる<br>(D,F,G,H),<br>厳しい教育<br>(H,I),<br>分離の寂しさ<br>(F),<br>過干渉<br>(H),<br>親を想い我慢<br>(H) | 分離の寂しさ<br>(K,M),<br>叱られる<br>(K) | 叱られる<br>(O,R),<br>分離の寂しさ<br>(R),<br>厳しい教育<br>(R) |
| | 自己対象体験の不全 | **否定的体験**<br>親の対応や態度により，心理的な傷つきが生じた体験。<br>($n$=8) | かまって欲しい: 母から可愛がられてたんですけど，いい子みたいに育てられたから，手のかかる兄の方が好かれてるような気がして。(A) | かまって<br>欲しい<br>(A) | かまって<br>欲しい<br>(D),<br>親とともに<br>揺れる<br>(E) | 一貫性のない<br>対応<br>(J),<br>母親の入院<br>(K) | 子育てに<br>戸惑う母親<br>(O),<br>かまって<br>欲しい<br>(P),<br>強制<br>(T) |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 幼児期・児童期 | 自己対象体験の不全 | **外傷的な体験**<br>親の対応や慢性的な態度により，心理的に深刻な傷つきが生じた体験。<br>($n$＝7) | 疎遠にされている: 母親のイメージって，どうしても兄がよく見られて，自分が疎遠にされてる。親にあんまり好かれてないのかなって。(L) | — | 理不尽に怒られる<br>(E,I),<br>怯え・萎縮<br>(I),<br>不安定な母親<br>(I) | 激しく怒られる<br>(L,M),<br>居場所のなさ<br>(L),<br>疎遠にされている<br>(L) | 怯え・萎縮<br>(P,T),<br>期待しない<br>(P,T),<br>両親の不仲<br>(S) |
| | | **希薄な関係**<br>親子間での交流が慢性的に乏しく，希薄な関係。<br>($n$＝4) | 交流の乏しさ: 親子でよく話してる友達見てたら，「よくそんなことまで話すな」って。自分はそんな特に話そうとも思わなかったし。(Q) | — | — | 交流の乏しさ<br>(L,N) | 交流の乏しさ<br>(P,Q) |
| 思春期以降 | 発達促進的な自己対象体験 | **肯定的体験**<br>親から生活や，やりたいことを支えられる体験。<br>($n$＝4) | 自由に選択させてくれる: 父は兄・姉の進路に口出して後悔したのかも。私の時は，部活も高校も自由に選ばせてもらいました。(M) | やりたいことを応援してくれる<br>(B) | — | 自由に選択させてくれる<br>(M) | 生活を支えてくれる<br>(O,Q) |
| | | **対立 自己対象体験**<br>親との関係を損なう恐れがなく，親に反抗したり，親と異なる考えを主張する体験。<br>($n$＝10) | 反抗: 中学からは私がちょっとスレたので。「親，嫌い」って，家に当り散らしたというか。(R) | 反抗<br>(B,C) | 自分の意見を貫く<br>(E,F,I),<br>反抗<br>(G,H) | 自分の意見を貫く<br>(L),<br>反抗<br>(M) | 反抗<br>(R) |
| | | **親への自己対象欲求の低下**<br>自己対象として親を求める気持ちが低下する体験。<br>($n$＝16) | 脱理想化: 父は正しいこと言うし，冷静で，かっこよかったんですけど，すごい細かいことで切れたから，幻滅。「え～」みたいな。(K) | 客観視<br>(A,C),<br>自分でやる責任感<br>(A),<br>脱理想化<br>(B),<br>家族よりも友達<br>(C) | 脱理想化<br>(G,D,E),<br>親の言動を受け流せるようになる<br>(D,F),<br>客観視<br>(D,G),<br>自己決定<br>(H) | 客観視<br>(J,K,L,M,N),<br>脱理想化<br>(K,N),<br>脱融合<br>(K),<br>自己決定<br>(N) | 客観視<br>(Q,R),<br>家族よりも学校<br>(O),<br>自己決定<br>(Q),<br>反抗心の低下<br>(R) |
| | | **成熟した自己対象体験**<br>親と心理的に一定の距離を保ちながら，自己対象として親と関わる体験。<br>($n$＝8) | 親の影響を肯定的に受容: 当時は嫌で仕方かったんですけど，今考えてみると，親にしてもらってプラスになったことって大きいなって。(R) | 親の影響を肯定的に受容<br>(B),<br>労わり<br>(C) | 対等な関係<br>(G,H),<br>労わり<br>(I),<br>内省<br>(I) | 労わり<br>(M) | 親の影響を肯定的に受容<br>(O,R),<br>対等な関係<br>(R) |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 思春期以降 | 自己対象体験の不全 | **親への未成熟な自己対象欲求**<br>発達的に未成熟な，親に対する自己対象欲求。<br>($n$＝10) | 母親との密着：母親が何もできない代わりに，自分が外で頑張ってる。母親は，全部子どもと一緒か，子どもに代わってやってもらう。(J) | 母親との密着<br>(A),<br>父親の絶対視<br>(B) | 母親との密着<br>(D,E,F),<br>ずっと好き<br>(F),<br>気にかけて欲しい<br>(D,G) | 母親との密着<br>(J,K),<br>気にかけて欲しい<br>(L) | 母親との密着<br>(O) |
| | | **外傷的な体験**<br>親の対応や慢性的な態度により，心理的に深刻な傷つきが生じた体験。<br>($n$＝3) | やりたいことを否定される：頑張ってるのに，「あんたには無理」って言われるから。そういうのけっこう痛い。(I) | — | やりたいことを否定される<br>(D,I) | 居場所のなさ<br>(L) | — |
| | | **割切る**<br>必要以上に親と関わらないように，割切る。<br>($n$＝2) | 必要以上に関わらない：この人達とはやっていけないだろうって気づいて，自分の気持ちをこめなきゃいい，表面的な会話しかしないように。(P) | — | — | — | 必要以上に関わらない<br>(P,T) |
| | | **親への感情の乏しさ**<br>親に対する，情緒的な反応自体が乏しい。<br>($n$＝2) | 何とも思わない：改めて両親に対してどう思ってたかって言われても，何て言っていいかよくわかんない。(S) | — | — | — | 親の印象が薄い<br>(Q),<br>何とも思わない<br>(S) |

注 1) 表中のアルファベットは，対象者を示す。

**幼児期・児童期**　自己の発達を促進すると考えられる『発達促進的な自己対象体験』は，〈鏡映自己対象体験〉〈理想化自己対象体験〉〈対立自己対象体験〉〈行動の共有〉〈適量の欲求不満〉から構成された。これらのうち〈鏡映自己対象体験〉〈理想化自己対象体験〉は，Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) の理論に基づく。鏡映自己対象体験は，親に自分を表現し受け入れられた体験，理想化自己対象体験は，理想化の対象として親を捉え，一体化したり，親から保護される体験である。この 2 つの下位コードは，「お母さんは自分の欲求を叶えてくれる人みたい。(鏡映自己対象体験; M)」「親から，これ着てって言われたら着てたし，やってって言われたらやったし。そ

れが普通と思ってた。(理想化自己対象体験; H)」のように，親との融合の性質が強く，原始的な自己対象体験と考えられる。また，この 2 つの下位コードは過半数の対象者にみられており (鏡映自己対象体験 $n$ =11, 理想化自己対象体験 $n$ =13)，多くの対象者が，この時期に融合した自己対象体験があったと考えられる。〈対立自己対象体験〉は，Wolf (1988 安村他訳 2001) に基づき，自己対象からの自己支持的な応答性を失うことなく，その自己対象と対峙し，対立的に自己を主張して立ち向かうことである。親との間に十分な自己対象体験が蓄積されているため，親との関係を損なう不安や恐れがなく，親に反発や，自己主張ができると考えられる。〈行動の共有〉は，親と様々な行動をともにするという内容である。「家族でたまに遊びに行くってなると楽しみでした。(D)」などと，肯定的な感情とともに語られることが多かった。そのため，背景に親との肯定的な相互交流があることが推察される。〈適量の欲求不満〉は，外傷的ではない程度で，親が欲求に対して反応や共感を失敗するなど，親へ失望する体験である。母親の不在や叱られるなど，養育上，不可避な体験を含む。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) は，親との十分な自己対象体験があった上で，子どもの発達に応じた適量の欲求不満を与えることにより，これまで親が担っていた，自己を安定化するための諸機能を内在化する (変容性内在化) としている。

自己の発達を阻害すると考えられる『自己対象体験の不全』は，〈否定的体験〉〈外傷的な体験〉〈希薄な関係〉から構成された。〈否定的体験〉と〈外傷的な体験〉は，親の対応や態度により，心理的に傷ついた体験である。特に，深刻な傷つきが生じているものが，〈外傷的な体験〉である。〈希薄な関係〉は，親との相互的な交流自体が，慢性的に乏しい内容

である。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) は，十分な自己対象体験がなかったり，外傷的な自己対象体験があると，変容性内在化が妨げられると指摘している。そのため，これらの『自己対象体験の不全』は，健全な自己の発達を妨げると考えられる。

**思春期以降**　この時期の『発達促進的な自己対象体験』は，〈肯定的体験〉〈対立自己対象体験〉〈親への自己対象欲求の低下〉〈成熟した自己対象体験〉から構成される。〈肯定的体験〉は，親から生活や，やりたいことを支えられる体験からなる。〈対立自己対象体験〉は，基本的に幼児期・児童期と同様である。しかし思春期以降は，両親からの精神的離脱と個の自立が発達の課題となる時期 (Blos, 1962 野沢訳 1971, 1967) であり，親への強い反抗がみられる。また自己主張の内容も，「ずっと X 大学に行きたいって言って。親もそれを見てたから，最後は許してくれたんだろう。(L)」というように，進路などの重要な選択が含まれる。〈親への自己対象欲求の低下〉は，これまで理想化していた親を客観視したり，友人など両親以外との自己対象体験を重視し，親への自己対象欲求が低下していくという内容である。〈対立自己対象体験〉や〈親への自己対象欲求の低下〉を経て，融合の性質が強かった自己対象体験が減少し，〈成熟した自己対象体験〉に至る。〈成熟した自己対象体験〉は，親と心理的に一定の距離を保ちながら，自己対象として親と関わる体験である。

『自己対象体験の不全』は，〈親への未成熟な自己対象欲求〉〈外傷的な体験〉〈割切る〉〈親への感情の乏しさ〉から構成される。〈親への未成熟な自己対象欲求〉は，母親と密着するなど，融合の性質が強い状態である。10 名の対象者にみられた。このうち，中学生や高校生の時期に〈親への未成熟な自己対象欲求〉が認められたが，その後，未成熟な自己対

象欲求が低下していく対象者 (B, E, G, K, L, O) がいた一方で，調査時点においても親と融合した面が強く残っている対象者 (A, D, F, J) もいた。後者の場合,原始的な自己対象体験を希求する傾向があると考えられる。〈外傷的な体験〉は，幼児期・児童期と同様である。〈外傷的な体験〉は，幼児期・児童期には 7 名にみられていたが，思春期以降は 3 名と減少している。思春期以降は，親への自己対象欲求が低下するため，外傷的と感じるほど,親からの影響は受けにくくなると考えられる。〈割切る〉は，親への否定的な感情から，自己対象として関わらないことである。親に対する自己対象欲求が低下しているという点では,『発達促進的な自己対象体験』の〈親への自己対象欲求の低下〉と類似する。しかし〈割切る〉の場合，「(親は) 聞いてくれないから。今日褒められたよって言うと，すごいねとか言ってくれるけど，そんなに思ってない。それで終わり。発展しない。(T)」というように，親の対応への不満がある。その根底には，親からの共感的な対応を希求していると考えられる。〈親への感情の乏しさ〉は，親に対する情緒的な反応自体が乏しいという内容である。

### (2) 自己愛的脆弱性サブタイプにおける親との自己対象体験

自己愛的脆弱性サブタイプの親との自己対象体験の特徴を明らかにするために，各サブタイプのこれまでの親との自己対象体験の特質と，典型事例を提示する。親との自己対象体験の特質は，Table 15 に各サブタイプの対象者の焦点的コードの出現状況を示した。また，それぞれの対象者の文書セグメントをコード別に整理した事例 - コード・マトリックスを，サブタイプごとに作成した。これは“それぞれの事例の個別性や具体性に対して十分に配慮しつつ，かつ他方では，事例の特殊性を越えた一般的なパターンやある種の規則性を見いだしていく上できわめて有効な作業になりうる”(佐藤, 2008) ためである。

**NV 低群**　幼児期・児童期に，3 名の対象者全員に『発達促進的な自己対象体験』のうち 3〜5 の下位コードがみられており，多様な自己対象体験があった。『自己対象体験の不全』は 1 名 (A) にみられたのみである。〈適量の欲求不満〉も 3 名全員にみられた。親との多様な自己対象体験があることと併せると，NV 低群の青年は，変容性内在化を経ており，親の担っていた心理的安定を維持する機能が内在化されていると考えらえる。それが，成熟した自己愛傾向のあり方と関連している。

【事例 C】*両親は共働きで忙しく，保育園や学童保育に預けられることが多かった。両親の様子を見て，きょうだいと家事を分担して手伝ったり，自分で解決できそうなことは自分でやるようにしていた〈適量の欲求不満〉。しかし，遅くなっても夕食は家族揃って，テレビをつけないで食べるという決まりから，「学校のことを両親に話したり，両親から，あれはどうだったのって聞かれたら答えたり」など，家族間での会話は多かった〈鏡映自己対象体験〉。また休日には家族でよく旅行し，「旅行になるとずっと一緒なので楽しかった」〈行動の共有〉。中学生の頃は反抗期で，親に言い返したり〈対立自己対象体験〉，「家族よりも友達が大事。一人で何かする方がよかった」〈親への自己対象欲求の低下〉。しかし次第に，「家族といる時間も大事にしたい」と考え，最近では母親に就職について相談したり，母親も反抗期中の妹への対応方法など C に相談してくる〈成熟した自己対象体験〉。*

C は，両親が共働きであり，普段は両親と関わる時間は少なかったと考えられる。しかし毎日の食事や休日には，親子の密接な関わりがあり，幼児期・児童期に多様な親との自己対象体験がある。それにより親と関わる時間の少なさも，適量の欲求不満となり，親の自己対象体験の機能が内在化されていったと推察される。思春期に入ると親への自己対象欲

求は減少し，母親と互いに相談し合うといった成熟した自己対象体験となった。幼い頃の多様な自己対象体験と，その後の自己対象体験の発達が，C の成熟した自己愛傾向の状態と関連していると考えられる。

**自己緩和困難群**　幼児期・児童期の『発達促進的な自己対象体験』が 6 名の対象者全員にみられている。そのうち 4 名 (D, F, G, H) の対象者に，『発達促進的な自己対象体験』のうち 4〜5 の下位コードがみられている。『自己対象体験の不全』がみられたのは 3 名 (D, E, I) と少なく，十分な自己対象体験があったと考えられる。それが自己の承認を求める自己愛的欲求や自己表現への抵抗の少なさに関連していると考えられる。また，〈適量の欲求不満〉も 5 名 (D, F, G, H, I) にみられており，十分な自己対象体験があったことと併せると，変容性内在化を経て，人に頼らずに自己の安定を保つ力があることが推察される。しかしこの結果は，理論的には自己緩和困難群の不安や抑うつを自分の力で緩和する力の弱さと矛盾する。調査時点での自己緩和困難群の親との関わりをみると，「電話はしょっちゅうします。かかってくることも多いし，私もかけます。(F)」「困ったこととか，ばーってしゃべります。解決して欲しいからじゃなくて，しゃべったら落ち着く感じがあるから。(D)」のように，親との関わりが密接である。これは，自己緩和能力の低さから生じているとは言い切れない。非臨床群の青年を対象に，自己愛的脆弱性とふれ合い恐怖心性, 対人恐怖心性を検討した研究 (伊藤・村瀬・金井, 2011; 上地・宮下, 2009) では，自己愛的脆弱性尺度のうち「自己緩和不全」以外の下位尺度が，これら 2 つの心性と正の相関がみられたのに対し,「自己緩和不全」は無相関もしくは弱い正の相関しかみられなかった。以上から, 本研究の対象者をはじめとする非臨床群を対象とした場合,「自己緩和不全」は自己愛傾向の脆弱さという側面よりも，他者と親密な関係を

維持する力があるという側面が強いのではないだろうか。

【事例 H】*両親は家族で出かけるのが好きだった〈行動の共有〉。家族みんな「話すのが好き」で，家族間の会話は多かった。H も母親に「いろいろ話すのが好きで，母親も聞くのが好き」で，いつも聞いてもらっていた〈鏡映自己対象体験〉。小さい頃は，親から言われたことをやるのが「普通」と思っていたが〈理想化自己対象体験〉，小学校に入ると「初めて嫌だって言ったりするようになりました」と，H の意見を伝えるようになった〈対立自己対象体験〉。一方で，両親が学校行事に積極的に参加したり，勉強に厳しいことは嫌だった〈適量の欲求不満〉。中学時代は「反抗期で親に当たったり」〈対立自己対象体験〉，親に何も言わず自分で決めるようになった〈親への自己対象欲求の低下〉。高校以降は両親と再び話すようになり，家族みんなでよく話している。現在は，「あの時こう思ってたとか今だから言えるようになって。親も中学の時はどうなるかと思ったって言ったり。いい感じで付き合えて来て，それはほんとに良かったなって思いますね」〈成熟した自己対象体験〉。*

H は，幼い頃から親との多様な自己対象体験がある。思春期以降は親への自己対象欲求は低下し，関わりが減少する。しかしそれは一時的で，現在ではお互いの意見を尊重しながら，親と親密な関係を維持しており，成熟した形の自己対象体験となっている。親との多様な自己対象体験に加え，会話が多い家族間の雰囲気が，自己表現への抵抗の少なさ，親密な関係を維持する力と関連していると考えられる。

**NV 高群**　幼児期・児童期に 5 名全員に『発達促進的な自己対象体験』がみられている。一方で『自己対象体験の不全』も全員にみられており，親との関係で傷ついた体験や，自己対象体験に不十分な側面があったと考えられる。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984

本城他監訳 1995) によると，自己対象体験が不十分であると，変容性内在化が妨げられるため，内的に自己を安定させる機能が脆弱となる。これが，この群の全般的な自己愛的脆弱性の高さと関連していると推察される。

【事例 J】*両親とは，休みの日に家族で出かけていた〈行動の共有〉。母親は，外出先で周りに迷惑をかけるのが嫌で，J が何か言いそうになったらつねる。そのため「外では絶対わがまま言わないっていうのがあった」〈否定的体験〉。また J は食物アレルギーがあり，「食べたいだけで決めると痛い目みる。母親の言うことを聞いて我慢する方が楽」だった〈理想化自己対象体験〉。思春期以降も母親とは「何でも」しゃべり，「細かい所まで言っても聞いてくれる」。また母親から「夫婦関係維持するのが大変っていうのも，10 年ぐらい聞いてる」。母親は外に出たり，人と関わることが好きではなく，「母親が何もできない代わりに自分が外で頑張っているイメージ」。現在も母親には何でも相談し，「分かってもらえる」〈親への未成熟な自己対象欲求〉。一方で父親は，話しても「気持ちを理解してくれない」が，父親世代の男性には「求めづらいのかとも思う」〈親への自己対象欲求の低下〉。*

J は幼い頃から，自己表現しようとすると否定される体験を続けてきた。アレルギー体質もあり，J の思いを我慢して母親の意見を受け入れてきた。J にとって，そのような母親との関係は「楽」であり，思春期以降も母親への自己対象欲求は低下しなかった。母親も，J が思春期に入った頃から夫婦関係の悩みを話す相手とし，J が母親への自己対象欲求を低下させることを阻害してきたと推察される。そのため，現在も融合の性質が強い自己対象体験が持続している。このような母親との自己対象体験のあり方により，J は適量の欲求不満を与えられず，そのため

変容性内在化が促されず，全般的な自己愛的脆弱性の高さをもたらしたと推察される。

**抑制優位群**　この群の青年は NV 高群と同様，幼児期・児童期に『発達促進的な自己対象体験』が 6 名中, 5 名の対象者にみられるが (O, P, Q, R, S),『自己対象体験の不全』も 5 名の対象者にみられている (O, P, Q, S, T)。NV 高群との差異は，思春期以降に〈割切る〉〈親への感情の乏しさ〉がみられたことにある。これらの下位コードがみられたのは，この群の 4 名 (P, Q, S, T) のみである。4 名とも幼児期・児童期に『自己対象体験の不全』がみられており,『発達促進的な自己対象体験』がみられない，または 1～2 の下位コードしかみられていない。これよりこの群の青年は，多様な自己対象体験がなかったと推察される。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) によると，子どもの自己は，自己対象の不十分な対応により損傷を受け，傷つけられる不安から，自己の承認や尊敬を求める欲求を意識から排除しようとする (水平分裂)。〈割切る〉の背景には，先に述べたように親へ共感的な対応を希求する気持ちが抑圧されていると考えられる。〈親への感情の乏しさ〉も，親との自己対象体験で満たされない欲求を抑圧しており，親に対して「深い印象が，ほとんどぱっと思いつかない。(Q)」「特に何も思わなかった。(S)」という情緒的に希薄な体験として捉えられている可能性がある。親との間で，自己の承認を求めるというような自然な自己愛的欲求を抑圧してきた体験が，自己表現を抑制する自己愛的脆弱性の特徴と関連していると考えられる。

【事例 P】*父親は単身赴任で「いないも同然」だった〈希薄な関係〉。母親とは学校の話をしたり〈鏡映自己対象体験〉，言い合うこともあった〈対立自己対象体験〉。しかし母親も仕事で忙しそうで，「自分からなに*

*か言うときっと嫌だろう」と思っており,「甘えることは全くと言っていいほどなかった」〈否定的体験〉。小学校の時に父親と同居したが，父親は一方的に怒鳴り，手を挙げるため,「怖いし，無関係になるのが唯一」と思っていた〈外傷的な体験〉。中学以降は,「父親は自分の価値観でしか考えていない。怒られるのは価値観が違うからで，自分が悪いからではない」と考えるようになる。また母親もPの気持ちを理解してくれないと感じ,「この人達とはやっていけない。付き合いを薄くし，会話に自分の気持ちをこめなければいい」と考える。以降,「経済的な面では感謝しているが，自分にとってはそれ以上の存在ではない」〈割切る〉。*

Pは,父親に否定的イメージを抱いており,外傷的な体験もしてきた。母親との自己対象体験はあったが，十分に自己表現し，受け止められてきたとは言えず，自己対象体験としては不十分であったと考えられる。それにより，幼い頃から自己愛的欲求を意識から排除しようとする傾向が培われていった。思春期以降，父親から怒られるのは「自分が悪いからではない」と，P 自身で自己を認めるようになる。並行して，両親との会話に気持ちをこめないようになる。このような親との関わりが，傷つきを独りで処理し，自己表現を抑制する自己愛的脆弱性の特徴と関連していると考えられる。

**(3) まとめ**

研究 3-2 は，自己愛的脆弱性と青年の回想的な語りによる，幼児期から青年期までの親との自己対象体験との関連を検討することを目的とした。NV 低群と自己緩和困難群は，多様な自己対象体験があった。これより，多様な自己対象体験が十分に蓄積されることが，自己の発達を促し，両群に共通する自己表現への抵抗の少なさという自己愛傾向の健康的な側面の発達に関連すると考えられる。一方，NV 高群と抑制優位群

は，幼児期・児童期に親との自己対象体験はあるものの，不十分な側面も多くあった。この不十分さが，自己の不安定さや自己表現の抑制といった自己愛的脆弱性の特徴と関連することが示唆された。

幼児期・児童期の親との自己対象体験が不十分であった NV 高群と抑制優位群は，思春期以降の親との自己対象体験に差異がみられた。この背景には，親への自己対象欲求を抑圧しているか否かがある。抑制優位群の場合,思春期以降は満たされなかった親への自己対象欲求を抑圧し，自己表現を抑制するあり方をとっている。NV 高群の場合，親との間に融合の特質が強い自己対象体験が持続している可能性がある。それが自己表現を抑制するものの，傷つきを独りで抱えられず，周囲からの配慮を求めるというあり方と関連すると推察される。

しかし，幼児期・児童期の親との自己対象体験が十分であった自己緩和困難群と NV 低群においては，両群の差が明確にみられなかった。この理由は 3 点考えられる。第 1 に, 対象者の質の問題である。対象者は，適応的な大学生活を送っている一般大学生であり，大半が深刻なレベルの自己愛傾向の脆弱さや，親との自己対象体験の不全はないと推察される。そのため，両者の関連を明確に見出すことが困難であったと考えられる。特に，本研究の自己緩和困難群の自己緩和能力の低さは，自己愛傾向の脆弱さから生じているのではなく，他者と親密な関係を維持する力の高さから生じていると考えられる。加えて，どの群にも一般的な親との自己対象体験の発達をし，成熟した自己対象体験に至っている対象者がいる。今後は臨床事例を含めて検討することで，様々な自己対象体験や不全が，自己愛傾向の形成にどのように影響しているかを明確に理解することにつながるだろう。第 2 に，本調査が 1 回の面接調査から行われたことである。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳

1995, 1984 本城他監訳 1995) の理論は, 長期間にわたる心理療法の過程から発展しており，面接を重ねるにつれ，クライエントは親への抑圧していた欲求を思い出し，語り始める。本研究では調査依頼時に，対象者に「小さい頃からの親との関係を尋ねるため，事前にふり返っておいて欲しい」と伝えていた。しかし，なかなか親とのエピソードを思い出せない対象者や，調査を進めるうちに思い出す対象者がいた。今後，継続的な調査を行った場合，より詳細な親とのエピソードや感情が語られる可能性が高い。第 3 に，本研究では親以外の自己対象体験については扱っていない。発達早期の自己対象体験は養育者である親が主と考えられるが，発達に従って，先生や友人，恋人，趣味などに自己対象体験の拡大が生じる (原田, 2006)。自己緩和困難群と NV 低群の差が明確にみられなかったのは，親以外の自己対象体験の影響も強く受けていたためとも推測される。そのため今後は，親以外の自己対象体験も視野に入れて検討することが必要と考えられる。

## 第 3 節 自己愛的脆弱性と自己対象体験の無意識的側面との関連 (研究 3-3)

### 1. 目的

自己愛的脆弱性と，母子画 (Gillespie, 1989) による自己対象体験の無意識的側面との関連を検討する。

### 2. 方法

#### (1) 対象者・類型化の手続き

研究 2-2 と同じ大学生・大学院生 209 名 (男性 70 名, 女性 138 名, 不明 1 名), 平均年齢 20.18 歳，標準偏差 1.28 歳であった。自己愛的脆弱性のサブタイプも，研究 2-2 と同様である。

### (2) 調査手続き

研究 2-2 の質問紙調査の際に，併せて調査を行った。講義時間終了後を利用した集団への実施と，個別の依頼により実施した。封筒に A4 判の画用紙と 3B の鉛筆，質問紙の一式を入れ，配布した。母子画の教示は馬場 (2005) に基づき,「お母さんと子どもの絵を描いてください」と行った。描画後に, 質問紙に答えるように説明を行った。調査実施の際, 調査への協力は任意であること，本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明した。その上で，質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。

### (3) 母子画の分析項目

馬場 (2005) による母子画の表現型 5 項目 (形態, サイズ, 表情, 身体接触, アイコンタクト) を分析指標とした。

## 3. 結果

### (1) 自己愛的脆弱性サブタイプにおける母子画表現型の出現状況

母子画の表現型 5 項目について，Table 16 に自己愛的脆弱性サブタイプの出現状況を示した。

Table 16
自己愛的脆弱性サブタイプにおける母子画表現型の出現状況

| | 自己愛的脆弱性サブタイプ | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | NV 低群 ($n$=82) | 自己緩和困難群 ($n$=45) | NV 高群 ($n$=50) | 抑制優位群 ($n$=32) | 合計 ($n$=209) |
| **形態** | | | | | |
| 母・全身/子全身 | 60 | 37 | 33 | 22 | 152 |
| 母・半身/子・半身 | 16 | 4 | 10 | 6 | 36 |
| 母・顔/子・顔 | 4 | 2 | 5 | 3 | 14 |
| 母・半身/子・全身 | 1 | 2 | 2 | 1 | 6 |
| 母・顔/子・全身 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| **サイズ (母親像)** | | | | | |
| 小さい (70mm×50mm の長方形以内) | 8 | 3 | 9 | 2 | 22 |
| 普通 (「小さい」と「大きい」の間) | 49 | 31 | 31 | 24 | 135 |
| 大きい (180mm×100mm の長方形以上) | 25 | 11 | 10 | 6 | 52 |
| **サイズ (子ども像)** (子ども像が母親像に隠れて測定できない場合は除外した) | | | | | |
| 小さい (45mm×40mm の長方形以内) | 13 | 6 | 13 | 5 | 37 |
| 普通 (「小さい」と「大きい」の間) | 53 | 36 | 31 | 20 | 140 |
| 大きい (130mm×70mm の長方形以上) | 6 | 2 | 2 | 4 | 14 |
| **表情 (母親像)** | | | | | |
| 笑顔 | 64 | 36 | 40 | 26 | 166 |
| 非笑顔 | 5 | 4 | 2 | 2 | 13 |
| 後ろ姿 | 2 | 1 | 0 | 1 | 4 |
| 空白の顔 | 11 | 4 | 8 | 3 | 26 |
| **表情 (子ども像)** | | | | | |
| 笑顔 | 54 | 36 | 36 | 23 | 149 |
| 非笑顔 | 14 | 5 | 5 | 5 | 29 |
| 後ろ姿 | 2 | 0 | 0 | 1 | 3 |
| 空白の顔 | 12 | 4 | 9 | 3 | 28 |
| **身体接触** | | | | | |
| 抱く | 16 | 2 | 7 | 7 | 32 |
| 手をつなぐ | 42 | 32 | 29 | 16 | 119 |
| 子からの接触 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 |
| 非接触 | 24 | 10 | 14 | 8 | 56 |
| **アイコンタクト** | | | | | |
| 母⇔子 | 9 | 3 | 5 | 5 | 22 |
| 母⇒子 | 14 | 6 | 9 | 5 | 34 |
| 子⇒母 | 5 | 3 | 2 | 0 | 10 |
| アイコンタクトなし | 54 | 33 | 34 | 22 | 143 |

注 1) サイズは，馬場 (2005) の基準により分類を行った。

馬場 (2005) では，大学生・短大生 597 名の母子画について，その表現型の出現頻度により，標準タイプ，準標準タイプ，非標準タイプの区分を行っている (Table 17)。標準タイプは出現率 50%以上であり，一般的で普通の母子画である。準標準タイプは．出現率 50%未満 10%以上であり，一般的とは言えないが，標準から大きく外れていない母子画である。非標準タイプは，出現率 10%未満であり，標準から大きくはずれた

特異な母子画であることを意味する。

Table 17
表現型の標準タイプ，準標準タイプ，非標準タイプ

| 描画指標 | 標準タイプ<br>(出現率 50%以上) | 準標準タイプ<br>(出現率 50%未満<br>10%以上) | 非標準タイプ<br>(出現率 10%未満) |
|---|---|---|---|
| 形態 | 母・全身/子・全身 | 母・半身/子・全身<br>母・半身/子・半身<br>母・全身/子・半身 | 母・顔/子・顔　母・全身/子・隠れている<br>母・半身/子・隠れている　母・顔/子・全身<br>母・隠れている/子・全身<br>母・顔/子・隠れている |
| サイズ | 母・普通/子・普通 | 母・普通/子・小さい<br>母・大きい/子・普通 | 母・大きい/子・大きい<br>母・小さい/子・小さい<br>隠れているため測定から除外<br>母・普通/子・大きい<br>母・小さい/子・普通<br>母・大きい/子・小さい<br>母・小さい/子・大きい |
| 表情 | 母・笑顔/子・笑顔 | 母・非笑顔/子・非笑顔<br>母・笑顔/子・非笑顔<br>母・非笑顔/子・笑顔<br>母・空白の顔/子・空白の顔 | 母・笑顔/子・空白の顔<br>母・非笑顔/子・空白の顔<br>母・非笑顔/子・後ろ姿<br>母・笑顔/子・後ろ姿<br>母・後ろ姿/子・後ろ姿<br>母・後ろ姿/子・非笑顔<br>母・空白の顔/子・非笑顔<br>母・空白の顔/子・笑顔<br>母・後ろ姿/子・笑顔<br>母・空白の顔/子・後ろ姿<br>母・後ろ姿/子・空白の顔 |
| 身体接触 | 手をつなぐ | 抱く<br>非接触 | 子からの接触 |
| アイ<br>コンタクト | アイコンタクトなし | 母⇔子<br>母⇒子 | 子⇒母 |

(馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究　北大路書房 より一部変更して引用)

馬場 (2005) の区分に基づき，本研究の対象者の表現型から，標準タイプ，準標準タイプ，非標準タイプに分類した。また馬場 (2005) によると，出現率 10%未満である非標準タイプは，標準から大きくはずれた特異な母子画であり，慎重に扱う必要がある。そこで各サブタイプで，一般的と考えられる標準タイプ・準標準タイプと，非標準タイプの出現頻度に差がみられるかどうか，Fisher の直接確率計算法により比較を行

った (Table 18)。その結果，いずれの項目も有意差はみられなかった。

Table 18
自己愛的脆弱性サブタイプにおける
標準タイプ・準標準タイプと非標準タイプの出現頻度の比較

| 描画指標 | 表現型タイプ | 自己愛的脆弱性サブタイプ NV 低群 ($n$=82) | 自己緩和困難群 ($n$=45) | NV 高群 ($n$=50) | 抑制優位群 ($n$=32) | 合計 ($n$=209) | $p$ 値 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 形態 | 標準・準標準 | 77 | 43 | 45 | 29 | 194 | 0.68 |
| | 非標準 | 5 | 2 | 5 | 3 | 15 | |
| サイズ | 標準・準標準 | 59 | 39 | 35 | 23 | 156 | 0.19 |
| | 非標準 | 23 | 6 | 15 | 9 | 53 | |
| 表情 | 標準・準標準 | 77 | 44 | 49 | 31 | 201 | 0.69 |
| | 非標準 | 5 | 1 | 1 | 1 | 8 | |
| 身体接触 | 標準・準標準 | 82 | 44 | 50 | 31 | 207 | 0.19 |
| | 非標準 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | |
| アイコンタクト | 標準・準標準 | 77 | 42 | 48 | 32 | 199 | 0.55 |
| | 非標準 | 5 | 3 | 2 | 0 | 10 | |

### (2) 自己愛的脆弱性サブタイプ代表 25%における母子画表現型の出現状況

自己愛的脆弱性サブタイプのうち，サブタイプの特徴をよく表すと考えられる 25%を抽出した。NV 低群から NVS 短縮版の総得点が低い 21 名，自己緩和困難群から「自己緩和不全」得点の高い 13 名，NV 高群から NVS 短縮版の総得点が高い 14 名，抑制優位群から「自己顕示抑制」得点の高い 13 名の合計 61 名であった。この 25%の NVS 短縮版の平均値，標準偏差を Table 19 に示す。

Table 19
自己愛的脆弱性サブタイプ代表 25%の
NVS 短縮版下位尺度得点の平均値 (標準偏差)

| | NV 低群 ($n$=21) | 自己緩和困難群 ($n$=13) | NV 高群 ($n$=14) | 抑制優位群 ($n$=13) |
|---|---|---|---|---|
| | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) | $M$ ($SD$) |
| 自己顕示抑制 | 2.44 (0.44) | 2.80 (0.76) | 4.11 (0.25) | 4.65 (0.25) |
| 自己緩和不全 | 1.62 (0.33) | 3.63 (0.21) | 3.63 (0.59) | 2.17 (0.56) |
| 潜在的特権意識 | 1.72 (0.48) | 2.09 (0.45) | 3.71 (0.73) | 2.18 (0.61) |
| 承認・賞賛過敏性 | 2.01 (0.66) | 2.88 (1.05) | 4.29 (0.39) | 3.86 (0.50) |

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を，下位尺度得点とした。

標準タイプ・準標準タイプと，非標準タイプの出現頻度に差がみられるかどうか，Fisher の直接確率計算法により比較を行った (Table 20)。その結果,「サイズ」で有意傾向がみられた ($p$ = .06)。残差分析の結果，自己緩和困難群は標準タイプ・準標準タイプが多く，非標準タイプが少なかった。NV 高群は標準タイプ・準標準タイプが少なく，非標準タイプが多い傾向があった。Table 21 に,「サイズ」の詳細な出現状況を示した。

Table 20
自己愛的脆弱性サブタイプ代表 25%における
標準タイプ・準標準タイプと非標準タイプの出現頻度の比較

| 描画指標 | 表現型タイプ | 自己愛的脆弱性サブタイプ NV 低群 ($n$=21) | 自己緩和困難群 ($n$=13) | NV 高群 ($n$=14) | 抑制優位群 ($n$=13) | 合計 ($n$=61) | $p$ 値 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 形態 | 標準・準標準 | 21 | 12 | 14 | 13 | 60 | 0.43 |
| | 非標準 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| サイズ | 標準・準標準 | 16 | 13* | 8† | 9 | 46 | 0.06 |
| | 非標準 | 5 | 0* | 6† | 4 | 15 | |
| 表情 | 標準・準標準 | 20 | 13 | 13 | 12 | 58 | 1.00 |
| | 非標準 | 1 | 0 | 1 | 1 | 3 | |
| 身体接触 | 標準・準標準 | 21 | 13 | 14 | 12 | 60 | 0.43 |
| | 非標準 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | |
| アイコンタクト | 標準・準標準 | 21 | 12 | 14 | 13 | 60 | 0.43 |
| | 非標準 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | |

Table 21
自己愛的脆弱性サブタイプ代表 25%における「サイズ」の出現状況

| 表現型タイプ | 内容 | 自己愛的脆弱性サブタイプ | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | NV 低群 (*n*=21) | 自己緩和困難群 (*n*=13) | NV 高群 (*n*=14) | 抑制優位群 (*n*=13) |
| 標準 | 母・普通/子・普通 | 11 | 10 | 6 | 7 |
| 準標準 | 母・普通/子・小さい | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | 母・大きい/子・普通 | 5 | 3 | 1 | 1 |
| 非標準 | 母・大きい/子・大きい | 1 | 0 | 1 | 2 |
| | 母・小さい/子・小さい | 2 | 0 | 4 | 1 |
| | 隠れているため測定から除外 | 2 | 0 | 1 | 1 |

## 4. 考察

研究 3-3 では，自己愛的脆弱性と母子画 (Gillespie, 1989) による自己対象体験の無意識的側面との関連を検討することを目的とした。自己愛的脆弱性サブタイプにおいて，標準タイプ，準標準タイプと，一般的な母子画から大きく外れていると考えられる非標準タイプの出現頻度を比較した結果，有意差は認められなかった。

そこで，自己愛的脆弱性サブタイプの特徴をよく表すと考えられる25%を抽出し，同様の比較を行った。その結果,「サイズ」で有意傾向がみられ，自己緩和困難群は標準タイプ・準標準タイプが多く，非標準タイプが少なかった。NV 高群は標準タイプ・準標準タイプが少なく，非標準タイプが多い傾向があった。人物像のサイズは，一般的に，被検者と環境の関係,自尊心や活動性,感情状態を反映すると考えられており，サイズが小さい場合は自尊心の低さや無力感，劣等感を，サイズが大きい場合は自己主張，過活動，攻撃性などを意味するとされる (高橋・高橋, 1991)。母子画において，小さいサイズの母子像を描く被検者は，馬場 (2005) によると，母親との間で安定した関係を体験できず，そのため他者との親和的な関係を期待できない，自分にも他者にも共感的になれないことを示すサインとされる。NV 高群は，非標準タイプのなかで

も「母・小さい/子・小さい」が 4 名にみられている。これより，NV 高群は，母親をはじめとする他者と，安定した関係を体験できていないと推察される。そのため，これまでの自己対象体験が十分ではなく，その不十分さが，無意識的な水準にも表れていると考えらえる。一方で，自己緩和困難群は,「母・普通/子・普通」が 10 名,「母・大きい/子・普通」が 3 名であり,「母・小さい/子・小さい」はみられなかった。これより，自己緩和困難群は，母親をはじめとする他者と，安定した自己対象体験があったと推察され，それが無意識的な水準にも表れていると考えられる。

しかし，自己愛的脆弱性サブタイプにおける描画表現型の出現頻度の差は，サブタイプの特徴をよく表す上位 25%の対象者において，有意傾向しかみとめられていない。これは，本研究の対象が非臨床群であったためと考えられる。研究 3-2 で，多くの対象者に幼児期・児童期に親との自己対象体験が認められていることと併せると，対象者の多くがこれまでに，ある程度の自己対象体験を有しており，それを自覚している。そのため，より無意識的な水準においては，自己愛的脆弱性サブタイプの差が明確に認められなかったと考えられる。

# 第 5 章　総合考察

## 第 1 節　本研究の成果

本研究は，青年の自己愛的脆弱性の特質をとらえ，自己愛的脆弱性の形成には，発達早期からの環境の影響が関連していることを明らかにすることを目的とした。そのために，自己愛的脆弱性と発達早期からの環境との関係を重視し，豊富な実証研究，縦断研究の蓄積がある理論や，これまでの自己対象体験との関連を検討し，以下の成果が得られた。

### 1.　自己愛的脆弱性サブタイプの明示

研究 1 では，青年期の非臨床群の自己愛的脆弱性を，NVS 短縮版 (上地・宮下, 2009) の下位尺度得点の組合せで類型化し，自己愛的脆弱性が全般的に低い NV 低群，自己緩和不全が目立つ自己緩和困難群，自己愛的脆弱性が全般的に高い NV 高群，自己顕示抑制が目立つ抑制優位群の 4 つのサブタイプを見出した。サブタイプの特徴は，次の通りである。NV 低群は，緊張や不安を自分で緩和する力があり，心理的安定を保つ力がある。他者から特別な配慮を求める傾向や，承認・賞賛への過敏さ，自己表現を抑制する傾向は低い。健康な自己愛傾向をもつ群と考えられる。自己緩和困難群は，承認や賞賛への過敏さは低く，周囲に自分を表現することに抵抗はないが，傷つきを独りで処理することができないという自己愛傾向の脆弱さをもつ群である。NV 高群は，傷つきを自分で抱えられず，周囲からの配慮を求めるが，周囲の反応に過敏で自分を出すことを抑える。自己愛的脆弱性の全ての特徴をもつ群である。抑制優位群は，傷つきを人に話すことなく自分で処理しようとする力はあるが，周囲に自分を表現した後には自分を出しすぎたのではないかと，自己表現を抑えるという自己愛傾向の脆弱さをもつ群である。研究 1 により，

自己愛的脆弱性の高低のみならず，その特徴に基づいた 4 つのサブタイプが得られた。

2. **自己愛的脆弱性と心理社会的課題，愛着スタイルとの関連の実証**

研究 2-1，2-2 では，自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚 (Erikson, 1950 仁科訳 1977, 1980), 愛着理論 (Bowlby, 1953, 1969 黒田他訳 1976) との関連を検討した。心理社会的課題の達成感覚では，NV 低群は全般的な心理社会的課題の達成感覚が高いこと，自己緩和困難群は自己のあり方に関する達成感覚は低いが，他者とのかかわりに関する達成感覚は高いこと，NV 高群と抑制優位群は全般的な達成感覚が低いことが明らかになった (研究 2-1)。愛着スタイルにおいては，自己緩和困難群が安定した愛着スタイルをもち，NV 高群と抑制優位群は不安定な愛着スタイルをもつことが明らかとなった (研究 2-2)。これらの研究より，個人の自己愛的脆弱性の背景には，発達早期からの心理社会的課題の達成感覚や愛着スタイルが関連していることが示された。

3. **自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連の実証**

研究 3-1，3-2，3-3 では，自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連を検討した。現在の自己対象体験では，NV 低群は自己対象体験を多く必要とせずとも心理的安定が保たれていること，自己緩和困難群は心理的安定を維持するために，周囲からの共感や，自分と同様の感覚をもっていると感じられるような自己対象体験が多く必要であること，NV 高群は周囲との類似性・共通性を確認することで心理的安定を保とうとすること，抑制優位群は理想的な存在を求める傾向が示された (研究 3-1)。これまでの親との自己対象体験においては，NV 低群と自己緩和困難群は幼児期・児童期に親との十分な自己対象体験があり，NV 高群と抑制優位群は不十分であることが示された。多様な自己対象体験が蓄積され

ることが，自己表現への抵抗の少なさという自己愛傾向の健康的な側面の発達と関連し，自己対象体験の不全が，自己の不安定さや自己表現の抑制と関連することが示唆された。幼児期・児童期の親との自己対象体験が不十分であったNV高群と抑制優位群は，思春期以降の親との自己対象体験に差異がみられた。抑制優位群の場合は，満たされなかった親への自己対象欲求を抑圧しているが，NV高群の場合は，親との間に融合の特質が強い自己対象体験が持続していると推察された (研究3-2)。母子画による自己対象体験の無意識的側面においては，自己緩和困難群は標準的な母子のイメージをもつ傾向がみられ，十分な自己対象体験があったこと，NV高群は標準的ではない母子のイメージをもつ傾向がみられ，自己対象体験が不十分であることが推察された (研究3-3)。これらの研究から，自己愛的脆弱性の形成の背景には，自己対象体験が密接に関連していることが実証的に示された。また，自己対象体験を質的側面，無意識的側面を含めて，多面的に検討したことは，本研究の成果である。

○

以上から，NV低群と自己緩和困難群は，心理社会的課題の達成感覚，愛着スタイル，自己対象体験が適応的な結果であった。一方，NV高群と抑制優位群は，いずれも不適応的な結果であった。NV低群とNV高群の違いから，自己愛的脆弱性の形成には，発達早期からの環境の影響が関連していることを示唆する。自己が，これまでの自己対象体験を十分なものと感じていれば，自己愛的脆弱性は低く，不十分と感じていると自己愛的脆弱性が高まる。この結果は，Kohutの理論を支持する。また，自己緩和困難群と抑制優位群の差異から，自己愛的脆弱性の視点か

ら青年を理解する際,自己愛的脆弱性の高低のみに注目するのではなく,その特質を含めて検討する必要性を示した。

## 第 2 節　本研究の限界と今後の課題

本研究の知見は，非臨床群の青年を対象にした調査から得られたものである。対象者が自己愛的脆弱性の高さを有していたり，自己愛的脆弱性の特徴を持っていても，大半は深刻なレベルにない。そのため，研究 3 の一部では，サブタイプの差を見出すことが困難であったと考えられる。今後は，臨床群を含めた検討を行うことで，サブタイプの差が明確に見出せると考えられる。それにより心理臨床の場で，臨床群への心理学的理解，支援につながる可能性が期待される。

また，研究 1，2-1，3-2 と研究 2-2，3-1，3-3 では，対象者群が異なる。類似した自己愛的脆弱性の特徴をもつ 4 つのサブタイプが得られたが，その構成人数,NVS 短縮版 4 下位尺度の構成は同一とは言えない。特に，抑制優位群の「承認・賞賛過敏性」得点は，研究 2-2，3-1，3-3 の方が，研究 1，2-1，3-2 と比較して高い。「承認・賞賛過敏性」は，心理社会的課題の達成感覚 (EPSI) のうち「信頼性」「自律性」「自主性」と中程度の負の相関，愛着スタイルのうち「アンビバレント」と中程度の正の相関を示しており，NVS 短縮版のなかでも重要な下位尺度であると考えられる。このため，本研究で得られた知見を青年理解に応用することには慎重を期する必要がある。しかし，異なる対象者群においても，類似した 4 つのサブタイプがみられたことは，開拓研究として有意味であると考えられる。今後も，この 4 つのサブタイプが妥当であることの実証を続ける必要がある。

本研究の知見をもとに，自己愛的脆弱性を抱えた青年への心理的支援

を行うためには，今後は，縦断調査を行い，サブタイプの安定性，変容のプロセス，変容に至った要因を明らかにする必要がある。青年が，どのように自己愛的脆弱性を克服していくのか，また克服に関連する要因にはどのようなものがあるかが明らかになれば，心理的支援の指針となるであろう。

**脚注**

1) 「同一性」は，本稿中の「アイデンティティ」と同義であるが，中西・佐方 (2001) のエリクソン心理社会的段階目録検査に関する記述のみ，本尺度の原語である「同一性」と記す。

# 引用文献


Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性　教育心理学研究, **50**, 215-224.

Akhtar, S., & Thomson, J. A. (1982). Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **139**, 12-20.

American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Text Rev*. 4th ed. Washington DC: Author.

(American Psychiatric Association　高橋三郎・大野　裕・染矢俊幸 (訳) (2002). DSM-Ⅳ-TR　精神疾患の診断・統計マニュアル　新訂版 医学書院)

馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究　北大路書房

Banai, E., Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2005). Selfobject needs in Kohut's self psychology: Links with attachment, self-cohesion, affect regulation, and adjustment. *Psychoanalytic Psychology*, **22**, 224-260.

Biringen, Z. (1990). Direct observation of maternal sensitivity and dyadic interactions in the home: Relations to maternal thnking. *Developmental Psychology*, **26**, 278-284.

Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.

(ブロス, P. 野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学　誠信書房)

Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence.

*Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162-186.

Bowlby, J. (1953). *Child care and the growth of love*. Harmondsworth: Penguin Books.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. London: Hogarth Press.

(ボウルヴィ, J. 黒田実郎・大羽　蓁・岡田洋子 (訳) (1976). 母子関係の理論―― I 愛着行動――　岩崎学術出版社)

Brennan, K. A., & Shaver, P. R. (1998). Attachment styles and personality disorders: Their connections to each other and to parental divorce, parental death, and perceptions of parental caregiving. *Journal of Personality*, **66**, 835-878.

Bulfinch, T. (1855). *The age of fable*.

(ブルフィンチ, T. 野上弥生子 (訳) (1978). ギリシア・ローマ神話 改版　岩波書店)

Ellis, H. (1898). Auto-erotism: A psychological study. *Alienist and neurologist*, **19**, 260-299.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.

(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)

Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton.

(エリクソン, E. H., エリクソン, J. M., & キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) (1990). 老年期――生き生きしたかかわりあい――　みすず書房)

Feeney, J. A. (1999). Adult attachment, emotional control, and marital

satisfaction. *Personal Relationships*, **6**, 169-185.

Fonagy, P. (2001). *Attachment theory and psychoanalysis*. New York: Other Press.

(フォナギー, P. 遠藤利彦・北山　修 (監訳) (2008). 愛着理論と精神分析　誠信書房)

Freud, S. (1957). On narcissism: An introduction. In J. Strachey (Ed. & Trans.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*. Vol. 14. London: Hogarth Press. pp. 69-102. (Original work published (1914).)

(フロイト, S. 懸田克躬・高橋義孝他 (訳) (1969). ナルシシズム入門　フロイト著作集 5　性欲論――症例研究――　人文書院　pp. 109-132.)

藤原正博 (1981). 自我同一性と自尊感情の関係　遠藤辰雄 (編)　アイデンティティの心理学　ナカニシヤ出版　pp. 85-89.

深瀬裕子・岡本祐子 (2012). 高齢者の語りに基づく母親的人物との相互性の変容　発達心理学研究, **23**, 55-65.

福井　敏 (1998). 誇大的な自己――自己愛性障害――　こころの科学, **82**, 75-80.

Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-Ⅳ edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press.

(ギャバード, G. O. 舘　哲朗 (監訳) (1997). 精神力学的精神医学――その臨床実践［DSM-Ⅳ版］――　③臨床編　Ⅱ軸障害　岩崎学術出版社)

Gillespie, J. (1989). Object relations as observed in projective mother-and-child drawings. *The Arts in Psychotherapy*, **16**, 163-170.

Gillespie, J. (1994). *The projective use of mother-and-child drawings: A manual for clinicians*. New York: Brunner/Mazel.
(ジレスピー, J. 松下恵美子・石川　元 (訳) (2001). 母子画の臨床応用――対象関係論と自己心理学――　金剛出版)

Hamilton, C. E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, **71**, 690-694.

原田　新 (2012). 発達的移行における自己愛と自我同一性との関連の変化　発達心理学研究, **23**, 95-104.

原田和典 (2005). 親との自己対象体験と自己構造の関係性についての実証的研究　心理臨床学研究, **23**, 434-444.

原田和典 (2006). 青年期における自己対象関係による支えについての実証的研究――半構造化面接による人生のふりかえりから――　青年心理学研究, **18**, 19-40.

Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.

Hendin, H. M., & Cheek, J. M. (1997). Assessing hypersensitive narcissism: A reexamination of Murray's narcissism scale. *Journal of Research in Personality*, **31**, 588-599.

Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relation: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, **9**, 489-508.

堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報)　上智大学心理学年報, **21**, 43-51.

乾　吉佑 (2009). 思春期・青年期への精神分析的アプローチ――出会いと心理臨床――　遠見書房

伊藤　亮・村瀬聡美・金井篤子 (2011). 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について――自己愛的脆弱性尺度を用いた検討――　パーソナリティ研究, **19**, 181-190.

岩壁　茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究――方法とプロセス――　岩崎学術出版社

上地雄一郎 (1997). Self Psychology (Kohut 理論) のアウトライン (Ⅰ) ――自己対象と自己対象転移――　総合保健科学 (広島大学保健管理センター研究論文集), **13**, 87-105.

上地雄一郎 (2004). 自己愛の障害とその形成過程　上地雄一郎・宮下一博 (編)　もろい青少年の心――自己愛の障害・発達臨床心理学的考察――　北大路書房　pp. 2-33.

上地雄一郎 (2011). 自己愛の臨床と実証研究の間　小塩真司・川崎直樹 (編)　自己愛の心理学――概念・測定・パーソナリティ・対人関係――　金子書房　pp. 37-51.

上地雄一郎・宮下一博 (2002). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み　甲南女子大学研究紀要, **38**, 1-10.

上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成　パーソナリティ研究, **14**, 80-91.

上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性　パーソナリティ研究, **17**, 280-291.

葛西真記子 (1999). 日本版「誇大感 (Grandiosity)」欲求尺度作成の試み――Kohut の自己愛理論に基づいて――　カウンセリング研究, **32**, 134-144.

川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史　小塩真司・川崎直樹

(編)　自己愛の心理学――概念・測定・パーソナリティ・対人関係――　金子書房　pp. 2-21.

Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.

Kernberg, O. F. (1982). Narcissism. In S. L. Gilman (Ed.), *Introducing psychoanalytic theory*. New York: Brunner/Mazel. pp. 126-136.

Kernberg, O. F. (1998). Pathological narcissism and narcissistic personality disorder: Theoretical background and diagnostic classification. In E. F. Ronningstam (Ed.), *Disorders of narcissism: Diagnostic, clinical, and empirical implications*. Washington DC: American Psychiatric Association. pp. 29-51.

(カーンバーグ, O. F. 佐野信也 (監訳) (2003). 病的な自己愛と自己愛人格障害――理論的背景と診断分類――　ロニングスタム, E. F. (編)　自己愛の障害――診断的, 臨床的, 経験的意義――　金剛出版　pp. 43-61.)

小林卓也 (2006). 自己対象体験の因子構造――心理的な支えという視点から――　福祉心理学研究, **3**, 64-71.

Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.

(コフート, H. 水野信義・笠原　嘉 (監訳) (1994). 自己の分析　みすず書房)

Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York: International Universities Press.

(コフート, H. 本城秀次・笠原　嘉 (監訳) (1995). 自己の修復　みすず書房)

Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* Chicago: The University of Chicago Press.

(コフート, H. 本城秀次・笠原　嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒　みすず書房)

近藤孝司 (2006). 描画法における対象関係のアセスメントの検討――変法 S-HTPP を用いての検討――　日本描画テスト・描画療法学会第16回大会発表論文集, 48.

近藤孝司 (2009). S-HTPP 法における自己愛の諸相――人物像の描画表現についての自己心理学からの理解――　心理臨床学研究, **27**, 333-343.

Leibowitz, M. (1999). *Interpreting projective drawings: A self psychological approach*. Philadelphia: Brunner/Mazel.

(レボヴィッツ, M. 菊池道子・溝口純二 (訳) (2002). 投映描画法の解釈――家・木・人・動物――　誠信書房)

Lewis, M., Feiring, C., & Rosenthal, S. (2000). Attachment over time. *Child Development*, **71**, 707-720.

松下恵美子・石川　元 (1999). 母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連について　臨床描画研究, **14**, 43-55.

三船直子・氏原　寛 (1991). 青年期の自己愛人格について――実証的研究を中心にして――　大阪市立大学生活科学部紀要, **39**, 199-213.

Miller, J. D., & Campbell, W. K. (2008). Comparing clinical and social-personality conceptualizations of narcissism. *Journal of Personality*, **76**, 449-476.

宮下一博 (1991). 青年におけるナルシシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家族の雰囲気との関係　教育心理学研究, **39**, 455-460.

宮下一博・上地雄一郎 (1985). 青年におけるナルシシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究 (1) 総合保健科学 (広島大学保健管理センター研究論文集), **1**, 51-61.

Näcke, P. (1899). Die sexuellen perversitàen in der irrenanstalt. *Psychiatrische en Neurologische Biaden*, **3**.

中村留貴子 (2004). 自己愛 (ナルシシズム) 氏原 寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典 改訂版 培風館 pp. 1077-1079.

中西信男 (1991). コフートの心理療法――自己心理学的精神分析の理論と技法―― ナカニシヤ出版

中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSI――エリクソン心理社会的段階目録検査―― 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 第2版 西村書店 pp. 365-376.

中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？――4カテゴリー (強制選択式, 多項目式) と3カテゴリー (多項目式) との対応性―― 九州大学心理学研究, **4**, 57-66.

中山留美子 (2006). 青年期における自己価値・自己評価の維持機能とその発達――評価過敏性・誇大性を指標として (平成17年度心理発達科学専攻修士学位論文概要)―― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, **53**, 197-198.

中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程――自己愛における評価過敏性, 誇大性の関連の変化から―― パーソナリティ研究, **15**, 195-204.

中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的変

化の検討　教育心理学研究, **54,** 188-198.

緒賀郷志 (2001). 自己対象体験尺度作成に関する基礎的研究――質問項目と妥当性の検討――　岐阜大学教育学部研究報告・人文科学, **50**, 125-132.

大石史博 (1987). ナルシシズムの心理学的研究 (1)　人文論究 (関西学院大学), **37**, 27-44.

小此木啓吾 (1981). 自己愛人間　朝日出版社

小此木啓吾 (1999). 精神分析から見た思春期心性　思春期青年期精神医学, **9**, 131-144.

小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究――性役割観との関連――　名古屋大学教育学部紀要・心理学, **45**, 45-53.

小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連　性格心理学研究, **8**, 1-11.

小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版

小塩真司 (2011). 自己愛の測定――尺度開発と下位次元――　小塩真司・川崎直樹 (編)　自己愛の心理学――概念・測定・パーソナリティ・対人関係――　金子書房　pp. 22-36.

Otway, L. J., & Vignoles, V. L. (2006). Narcissism and childhood recollections: A quantitative test of psychoanalytic predictions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 104-116.

Pistole, M. C. (1995). Adult attachment style and narcissistic vulnerability. *Psychoanalytic Psychology*, **12**, 115-126.

Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.

Ronningstam, E. F. (2005). *Identify and understanding the narcissistic*

*personality*. New York: Oxford University Press.

斉藤早香枝 (2000). 乳児期の愛着形成における母親の愛着表象と母子相互作用の影響　北海道大学医療技術短期大学部紀要, **13**, 41-52.

佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定――自己愛人格目録 (NPI) の開発――　和歌山県立医科大学進学課程紀要, **16**, 63-76.

佐方哲彦 (1987). 自己愛人格と共感性の関連　和歌山県立医科大学進学課程紀要, **17**, 67-75.

佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法――原理・方法・実践――　新曜社

清水弘司 (1999). 幼児期の母子分離型と青年期の自己像――連続性と転機の検討――　発達心理学研究, **10**, 1-10.

清水健司 (2011). 自己愛と対人恐怖　小塩真司・川崎直樹 (編)　自己愛の心理学――概念・測定・パーソナリティ・対人関係――　金子書房　pp. 70-87.

清水健司・海塚敏郎 (2004). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の基礎的研究　広島国際大学心理臨床センター紀要, **3**, 23-32.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について　心理学研究, **78**, 9-16.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008a). 対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連　パーソナリティ研究, **16**, 350-362.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008b). 対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデルにおける自我同一性の様相　心理臨床学研究, **26**, 97-103.

清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討――対人恐怖と社会恐怖の異同を通して――

教育心理学研究, **58**, 23-33.

清水健司・岡村寿代・川邊浩史 (2010a). 対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデルにおける心理的ストレス過程　人文科学論集・人間情報学科編 (信州大学), **44**, 75-84.

清水健司・岡村寿代・川邊浩史 (2010b). 対人恐怖と自己愛の相互関係モデルにおける自己概念と怒り感情　日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 23.

白井大介 (2005). 自己対象体験尺度作成の試み　臨床・発達心理学研究 (神戸大学総合人間科学研究科発達基礎論講座紀要), **4**, 61-68.

白井大介 (2006). 自己愛的人格の 2 つのサブタイプにおける背景要因と自己対象体験　臨床教育心理学研究 (関西学院大学), **32**, 37-41.

Smolewska, K., & Dion, K. L. (2005). Narcissism and adult attachment: A multivariate approach. *Self and Identity*, **4**, 59-68.

高橋雅春・高橋依子 (1991). 人物画テスト　文教書院

高橋智子 (1998). 青年のナルシシズムに関する研究――ナルシシズムの 2 つの側面を測定する尺度の作成――　日本教育心理学会第 40 回総会発表論文集, 147.

詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度――成人版愛着スタイル尺度作成の試み――　東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.

谷　冬彦 (2004). 新たなる自己愛人格尺度の作成 (1) ――因子構造と対人恐怖的心性との弁別性の確認――　日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 69.

戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル――作業仮説 (working models) からの検討――　日本心理学会第

52 回大会発表論文集, 27.

Van IJzendoorn, M. H., & De Wolff, M. S. (1997). In search of the absent father: Meta-analyses of infant-father attachment. *Child Development*, **68**, 604-609.

Ward, M. J., & Carlson, E. A. (1995). Associations among adult attachment representaions, maternal sensitivity, and infant-mother attachment in a sample of adolescent mothers. *Child Development*, **66**, 69-79.

Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, **71**, 684-689.

Weinfield, N. S., Stroufe, L. A., & Egeland, B. (2000). Attachment from infancy to early adulthood in a high-risk sample: Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*, **71**, 695-702.

Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.

Wolf, E. S. (1988). *Treating the self: Elements of clinical self psychology.* New York: Guilford Press.

(ウルフ, E. S. 安村直己・角田　豊 (訳) (2001). 自己心理学入門――コフート理論の実践――　金剛出版)

山岸明子 (1994). 女子青年の内的作業モデルと過去から現在の対人的経験との関連　順天堂医療短期大学紀要, **5**, 52-63.

山岸明子 (2000). 内的作業モデル尺度の構造と 4 時点での変動――女子看護短大生を対象として――　順天堂医療短期大学紀要, **11**, 41-50.

山岸明子 (2013). 青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連――内的作業モデルを手がかりにして――　青年心理学研究,

**25**, 29-43.

山室　静 (1962). ギリシャ神話　社会思想社

吉井健治 (2007). 過敏型自己愛人格傾向の青年の事例――自己の傷つきの再体験への恐れ――　カウンセリング研究, **40**, 306-315.

# 謝　辞

学位論文を作成するにあたり，多くの方々からご指導とご協力を賜りました。

主任指導教員である岡本祐子先生には，大学院入学以来，未熟な私をここまでご指導いただきました。私が，研究が思うように進まずに悩み，心が折れそうになった時には，本研究の意義を認め，強く支えて下さいました。岡本先生の研究に対する情熱と深いご理解に基づいたご指導を受け，学位論文として完成に至ることができました。誠にありがとうございます。

副指導教員をお引き受けいただいた兒玉憲一先生，中條和光先生をはじめ，心理学講座の先生方には，ご多忙の中，丁寧にご指導していただき，多くの重要なご指摘をいただきました。また岡山大学の上地雄一郎先生からは，研究に限らず，数々のご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

質問紙調査，長時間にわたる面接調査にお付き合いいただいた協力者の皆さま，お力添えいただいた信州大学の先生方に心より感謝いたします。

最後に，数々の助言を下さった先輩方，支え励まし合ってきた同輩と後輩，暖かく見守ってくれた家族に感謝いたします。

平成 26 年 1 月 25 日